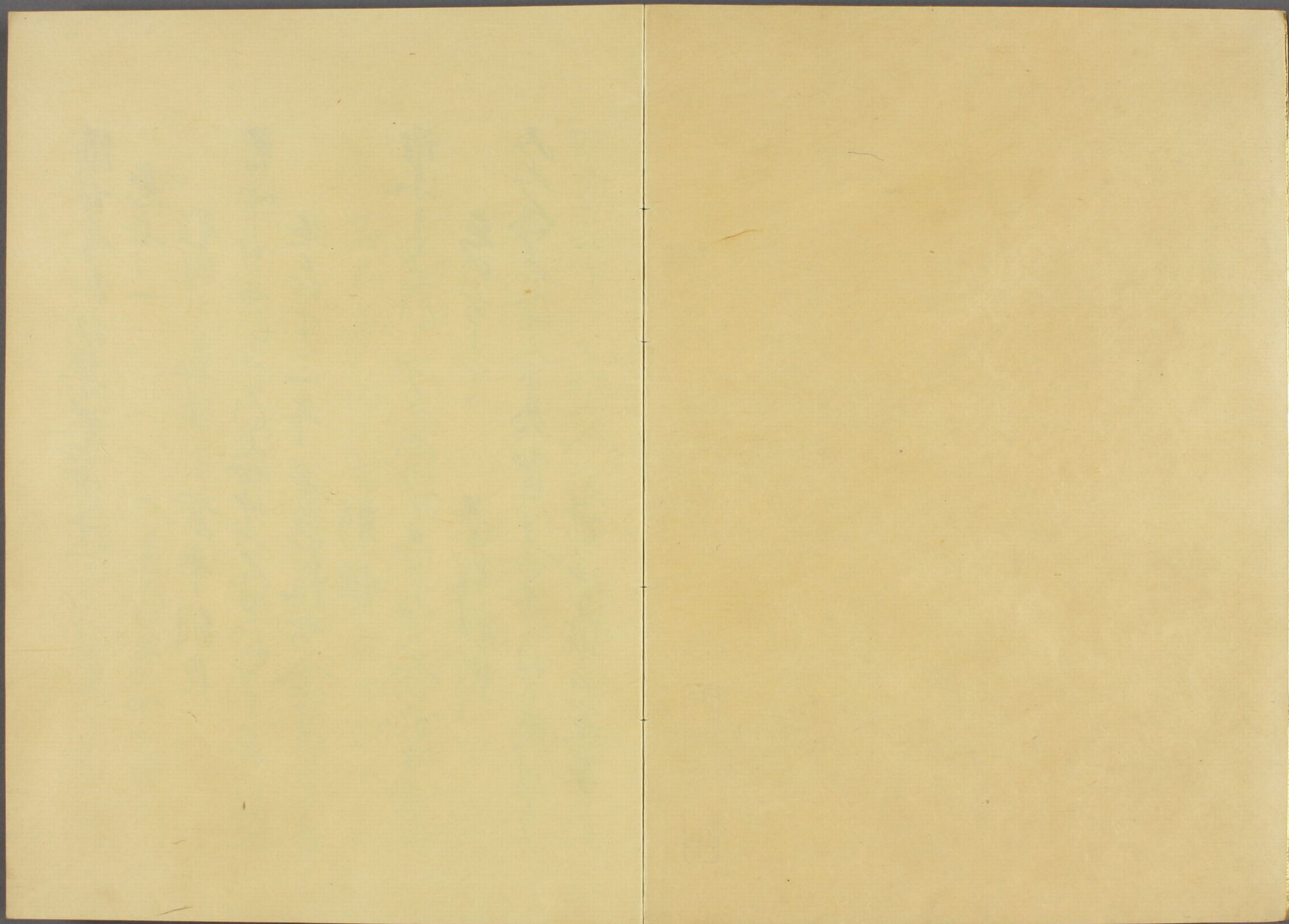


續古今和歌集下







續古今和歌集卷第十一

惠哥一

野一らす

業平朝臣

君ふらりおひるひぬ世中れんをれや恋とんた

延長十三年亨子院方合り

躬恒

誰ふらりおひるるんそと恋ぬう人のほこり

恋の方とそ

素性法師

みぬんふひるよぬおまほまほまほ集恋り

前中納言定家

かきらあまこみぬ人の恋こ首やふく契り

和方取て六首方合ゆけふ初恋

泰後雅經

素ふらやんよん具は波りきても恋ぬ神命を

右大臣これ時の百首よおのこ

後は性寺入道前書

しりそむ恋海の末のをえんよのそとこ我ん

弘長元年百首方よ

入道おを政大臣

あせるまこころみとぬ面娘やに河をのそむん

神皇正統記 土御門院水奇

今もなおおまのなふり出く心のまこととせはる
坂上是則

おろ多ふうりてこひね九波のまろくみとらなり
前大納言忠良

こふり社いぬく深てりらぬのまろやあまこたるん
光の若も入道前持政家忠十そのお方合

よ穿衣忠
後鳥羽院内侍の曲侍

山姫のまぬなをとおのまよ出てやとひ忠ま
建仁元年十二月和方取の命合り

前大納言澄房

子とがふとおまうらりや深はほおあうるは袖ふら
因大にう時百そよらあ忠

光の若も入道前持政家忠

いふ女人神よりおふりこの下等うけてまよ出あ
忠の方とて 信実の忠

あふらいつまういふらるんみをとんやあふら
崇徳院よ百そよ方なまらり

皇太后宮女中後成

あふらいつまういふらるんみをとんやあふら
あふらいつまういふらるんみをとんやあふら

野一子

前大御忠良

下よの忠ぶらうとらにけいさくふらなれぬなり

大藏の有家

下蔵のわらうあなれ露りりしそ初秋なる風

右系敏行朝臣

人よの忠ぶらうとらにけいさくふらなれぬなり

建長二年方合よ忠ぶらうとらに

あ右大臣

忠ぶらうとらにけいさくふらなれぬなり

人よの忠ぶらうとらにけいさくふらなれぬなり

中務の親王

みらの忠ぶらうとらにけいさくふらなれぬなり

忠ぶらうとらに

いそとらにけいさくふらなれぬなり

あつとらにけいさくふらなれぬなり

新徳方合よ忠ぶらうとらに

太上天皇

忠ぶらうとらにけいさくふらなれぬなり

忠の四方れの中に 後鳥羽院御

米よの忠ぶらうとらにけいさくふらなれぬなり

弘長元年百々方々初念

前田大佐 卷

ゆきよひのふれやしりえそめてきつまつとくはえは
寄麻恋とらるんを

鎌倉右大臣

秋乃登れおらりこれ鳴麻のやれふのちやまらりえ

都 一 らす 右衛門督兼捕

人志とらるる秋翁の下葉乃多よ出ぬとら

百々方中に寄風急

右近中将経平

あつめや善いのこも秋風乃多よとららるん

悲いあつらんりつらけり

後法云

けそやと悲いなるる龍虎いなる登へよらふん

前田大佐 卷 家百々方合り

権大納言政綱

まきねの面をりほしなりおこまぬやう落ける足

洞院持政家百々方々悲念と

藤原門院少将

あひねの洞ふそらうら月つららるんを

弘長二年十首方稱一竹一木思得之

其上天皇

我らよ又御よりりきりまるといつく月をさき
名取共首方れなりふ

前内大臣 基

はつふ本くれあつて月をさきひきりあつて
野一す 躬恒

とと留りやんめはきりあつて出の
入道二品名助は親王家五十その方り
寄枕意 西園寺入道おとせ長良

なふと又枕のちりとりあつて
寄雲意 侍後行家

とせらやそいりあつて浮雲はあつて
望た后文内侍

とせらあつてあつてあつてあつてあつて
後二位家澄

あつてあつてあつてあつてあつてあつて
名取百三十八人

順法院卿方

神あつてあつてあつてあつてあつてあつて

都一らす

前中納言定家

忠徳ぬらのたれあつて忠義も時をこゝろみごと

信美朝臣

あつとをさう神の下に業みえぬ子たわらむ世

お大納言基良

いふともみゆん神の初時をむらりてあつた

公卿門院山守

いふか様ゆいひのり河をさうかえねふとて

後二位通氏

いふこれふ出つて秋をさるゝをさう神の時を

中務卿親王

いふあつてまふれ松を初と後よゆえぬ神の時

実為忠と

後鳥羽院文因

あよ出ぬこのころとれぬ心我身忘これふとて

忠方中納言

中納言

あつてあつて神のふちを木も露もあつてあつて

先後初代とてめつるる百それ忠の事

後三位頼能

あつて我あふとてあつてあつてあつてあつて

百それ中納言

順徳院山守

我神や木の陰ある枝葉れうへつとるれらふ出らん
むらす 友原光俊頼氏

柘栲と新瑞の奈よ申くふとるるよつをていへり
寛治二年百々方よ寄弟恋

前々改大信

人志しと思ふの弟ふく露れ乱てのやとひいふ
建長二年方合しゆし思恋

今上天皇

とらぬともあつふいふはばそん形見よ思ふん今
慈舟とて 右近之将通忠

ふかやうなるやんゆふとそ思ふ付てふの月日

因大信

わが若ねよつら白浪のうらもよまわ恋ぬか

百々方あてまうりし時寄鳥恋

後之位為继

ふかやうなるたそを物とていふとたしうのたのめ

むらす

躬恒

ふらりゆよわつとらこもみかをそ我ふらとる

よまうりし

ふかやうなるいしうらふらるるふ恋と深しうら

見事のてきともみえぬは水乃下れんとてそのさ
弘長元年百首うたは忠意と

入道前太政大臣

らふこもいさむか意根も浮き年あつ下の心
忠意のん

権中納言長雅

かたおの下のりおれねよあつと人よとて神神あま
三首うたはゆい時忠意

侍従行家

世よりい我のこやこころえとてせあはるるを
建長二年吹田十そより

藤原信實約長

年へののほよと意あわつてとて思ひのりもやんよと
後は性寺入道前宰相長はゆりきる所
乃百首に
皇太子后太子太子俊成

身おろの海ふあまお神あふふふとてと意とつまん
子五百番うた合ふ久納言通具

世さむけり神の海ふ思ふともそれあつねと
むらす
衣笠前内大臣

をらあや思ふと人のさふらんよかき海けりぬと
伊勢

海をくさ波や河をみくさりくさなりまはる

藤原門院少将

神の上ふむみ波のきみえいふせんを神の鳴ん

中務卿王家百々奇よ志と

前代菩提教定

いふせんといさめく海よりやそ子入のきふそあ

都一らす 西行法師

神のうらめしき道行のまへにみればあつて我海

慈鎮大僧正

我海吾等の河よりくさいせりこれ申ふあつて

よめいてんよ物中つりつ

和泉式部

何ともしよはあて思ふといそ海の中よりあ

子五百書方合よ 泰後雅經

こいせくらのあはれをてあつて神のきふみえ

寛治二年百々奇寄海志

前大細を為家

をいふ乃海れあよんよ思ひよ志りつ神や

新院并内侍

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

形不知

よき人から次

けりあめれぬ新とみほしより誰とせよお念持
用白たは良家百そふ見念

前久徳云為家

うやうあわれ里のなれ目ふらそよそふその心
おろしとよそふを給けり

今上御前

整りよるはみほしとよわらうに神のあらん
お中納言定家

しほしあさこのほれ系乃らよらふとよそふ
ひらき

唯田十そ方よ 前たは良

難波あつらうられ整りよおさうあはらぬ
形一らす 心と念人

むらうふいふあひそよと給のふまきき日ふ念
四月一日此人のりしつらけり

友原花永物た

おしほし鳴そ志ぬと河原へよまきとせぬ物言ふれ
八條を政た良家方合り夏念

た系たま忍捕

なぬいふはほきんうそ我らうらけり

むらさ

曾祢好忠

物かき君よとてく新の菊は籬よとてみえん
うらまのらうとてまをよてうら中に新やま

よら

ひらきう書おれこのまのこまてんよまてん

寛平四時后文方合年

よまてんよまてんよまてんよまてん

百三四方中に 頂徳院御奇

今又よとて何ううらわ下ふもあまうとてま

方橋志と

僧正好忠

よまてんよまてんよまてんよまてん

志方れ中に 式乳門院御連

おのよたのし契られしうらとてよまてん

家よとて合一ゆげうら

正二位季隆

うらとて志方れ米れをうらとて入ても年のおん

むら

よら

下つてやまの八橋よまてんよまてん

志せよとてうらとて八橋れうらとておとよはれ

大の川井せうとてうらとておとよはれ

契不逢意の心と 大系大支取捕

仍と向りあしきまをていふのじや意のあまのめん
嘆後社方合よ 正三位行家

後の世と契つとあまをいひをまをて意のあまのめん
孝王朝意雅のふととよあ
正三位行家

いままてうまねくこひ人をとれ程く系よあまのめん
むしらす 前入納之基良

伊勢の海女みらあはらひは海よひくは神の白玉
寄玉意の心と 新院并内侍

あひのむつ波のあまをいひわさや神のてくらあ

百そ方中に 衣笠前内大臣
いままてうまねくは枝のみめ縄つまあまをてあ

洞院坊政家の百そよ思意とよあ
人あのとあまの心にゆふあまのあらふ枝やそえん

意志す 昔部元良親王
あまふとあゆふらあまをてあまのあらふ枝

不逢意の心と 権律師澄昭
あまのらあひあまをてあまのあらふ枝

法下免寛

百歳まであつていふ命はあつてもいほむらぬ
文永元年内裏にて世をうけ継ぎしにけり
宗の末裔と
侍臣の家

その世にあらぬふたにやうに本はねとみぬ物と云ふ
郎一とす
藤原門院少将

あまの世よ命のかゝらぬ世にあらぬ世と云ふ
た京のまはら捕家と云ふ
氏部と云ふ

世にあらぬ身ふらりあまの世にあらぬ世にあらぬ
世にあらぬと
権中納言と云ふ

つとむらぬと云ふ世にあらぬ世にあらぬ
と云ふ世にあらぬ世にあらぬ世にあらぬ
西行法師

何れよきふと云ふ世にあらぬ世にあらぬ
文永二年九月十三夜の方合よ不承意
と
関白前たるは

何れよ神のたまはと云ふ世にあらぬ世にあらぬ
前大納言と云ふ

そのつと云ふ世にあらぬ世にあらぬ
大納言通成

中へふえとらぬのこみえあふらて身もはばま
中ゆき文平雅忠

徒よそのもはばしお母のこ我月れ雲路なるら
内裏百首方よ書心恋

侍従行家

命の雲より卯あふささよこゆこ路のそなる足
あふらんとよませ給けり

去河門院水奇

伝流なるあさゆりこれゆうなこひの末をあつ燃とあり
恋の文れゆい 紀貫之

あそく我恋はらん志あのなら後まのこれ多しいなるも
名可恋と 中務親王

くふる恋とすうこれさるまよぬふれ多しいなるも
百首書方合よ 二條院續成

面をねも立そふ雲いふ物と恋の燃とゆふ方これ
寛治二年百首方ふ寄煙恋

皇太后宮女中後成女

いあり恋の燃の消りて空れ八橋やちのあふあそん
ねらふらんと 兼道法師

絶はあつじらふ八橋のそりて下海うみのこひあ

藤原光俊朝臣

絶とありし所の浦より燈いり成時よりいそぎん

平親清母

ふたりの所を浦よりとりの燈あせぬといひん

源俊定朝臣

下じき河太の燈いりてふかあせといひしん

正三位朝臣

あふゆり浦の燈もわつと立ちぬといひしん

内大臣よりつげりし時より百さふりといひん

先朝の御名をいふおぼえたり

任者よりいふこと元年よりゆりといひしん

又永元より十二月内裏三首よりいふ松意

入道公良教

あつたありし所の松意もあて我よりいふといひん

不遇意れといふ 右昔もあせぬ教

秋より松の梢よりいふ河内よりいふといひん

順徳院よりいふ百さふり

前中納言定家

あつたありし所の松意もあて我よりいふといひん

千五百番よりいふ百さふり

後鳥羽院御奇

蓋の雀あつてふとなくしあまをとりて神の御あき
まて
御一らす 糸後宮

身のみ人園遊をとりていせはあり立おきくらひて
女御最子女王まのりんとてはとけり

けしハ

天曆御奇

冬ころあつたあはれ川をみあき母をとりて
百首方よ恋のころと

式部門院御奇

こひ川あはれまてとらみあはれとらりて命を消のころ

中細云為氏

恋倦てけしとふもやとふ人のだめを命はな
顔面門院上補のまてけり百首方よ

前中細云定家

はとらみあはれ神の介けりあはれ先さくらん
恋の方中に 醜入道前を政長女

人志あ神れみあとのけりけりあはれけり
御院持政家百首方より

先的家も入る前持政長女

涙のころあつてあはれあはれあはれあはれあはれ

野一らす

葉平のた

海川をたゆまぬのむきれや身とらふこといふは

考指意と云とと 平長時

洞河とてぬ中れ心ひねるも何とあはれなきに

前内大臣基家の百とて方合らと

源具氏下

年とて海よりふあふとて程の家ちねまは

寄細意と程々 後二位成実

意とて神これ浦は虫細のめふたまぬ海女り

百とての中い 前内大臣基

あひとていづらあひのつとてとていふ海女

寄河意とと 入道前大臣

神のこも海にみと指よらんす村河の那

意とてとと 紀貫之

さひつじ物と意ひ知海のみとらとてとて

先内寮も寺入た前指家百とてし奇に

源有長下

せく神のぬは海川とてぬらそ中ら

むーらす 少将内侍

ます鏡をのふとらりも海とてとてふと

樽車人丸

あまのりやうのまのまのつゆあつとと人々と意あつた
困院大君

昔らあまのりやうのまのつゆあつたのむとと人々
右近中將雅家

この系乃あまのりやうのむとと人々
意の芳の中い 皇太后后文平後成女

よきそつゆあつたのむとと人々
寄一浦意と 友原光俊御下

よきそつゆあつたのむとと人々
後系極括政前太政大臣

わつたつゆあつたのむとと人々
源俊平

よきそつゆあつたのむとと人々
前大納言意宗

よきそつゆあつたのむとと人々
後二位家澄

よきそつゆあつたのむとと人々
あ中細云直房

よきそつゆあつたのむとと人々

ひつとせぬらうの契りいひくし物こゝに女よとあはれ
くよ給りせり 一條院御方

我軍ついでにさきの御方すじのいふ書きし御方
御しらす 鎌倉右大臣

わがたゝまのちれひのいふさうなまゝいふに御方
そのせぬ女よつらけり

右 大進大將綱光

心算いさうあふとあ物と書せぬ人よと書し御方

秋末恋々 惟宗忠系

いふ事ふ給てあせとるのいふあふはに秋風を吹

百首方人いひとめ約けるふ恋奇 有原光後御下

はのまはわのあふと給じてひまようあまこふよ
歳書恋々 権中納言公宗

つとあまのけりる月日とてもいとあつとていふ御方
後京極坊政家方合よ契歳書恋々

前中納言定家

わが玉の年れとまはらふとて公つらあはれあはれ

この書ふともあめて二書とていふとる
人よつらけり 有原光

北河のあきくはよひまうつとくを善くさるりてあやん
吹回みく十首方鎌一竹一ふきと

入道前を政大臣

我意の漸よわち舟のあきくあきくうさへさくしつわつた
部一らす 一ふき

唐津河神つくり後さきとくありて我やおとん
昔来依よ竹けりつりけり

監令婦

柏木の枯れ下草おひぬし身と後よあきすと
返一

僧正遍昭

うらあめりされ下草老の世ふく心とひ

あきくをわらふ

續古く和歌集巻第十

恋方二

五十首方人ふみりけふ草恋

後鳥羽院御寄

神よそく露花ゆく恋もあはれそに秋の夕ゆ

建暦二年廿首方なりけりふ

後二位家澄

東海乃さめ舟橋さのちけきこよけりたのまん

透物恋

前控大納言云矣

我々君約事とけりいひてまいたのめとぬらさむと

は性ち入る前雲白家方合り

前番後親澄

恋ふて心けしよ今まそとたのむまかういされ松

野一らす

友承信実御下

恋ふたそとそとそとそとそとそとそとそとそとそと

恋の由方れ中に 順徳院御寄

恋ふていふとそとたのむむとそとぬらさむと

寄水恋乃らそ 前た大臣

うらきとそとそとそとそとそとそとそとそとそと

恋の寄り

後鳥羽院梅系

わささくぬすまはのますをのつる契まれば日教
式乳門院浄蓮

涙のこゝろとていひともて宿る袖の月
月前迄の心と 新院少将内侍

あせし月や屋そらうはさしつは
後鳥羽院浄河おろし心と

久細玄通具
詠まゆやうり秋の月迄これまてうはかき

寛治二年十月さうよ寄月迄と
後鳥羽院下野

月よふらぬやとみ物ともう面影のたすえ
寄雨迄

かきうりたのひらうひら村をよらぬ人の心
後系極按政家寄合り

は橋取昭
はくはし月よとそらねをそく意やしはさる

むくのかさけぬかり長き秋実まてみうの月
権少僧都云頼
中務親王

ゆかきふやうは建徳のひさせありせし秋の月

十首方合よ寄一月恨恋

前大臣信長

在の月とていづしむあきし海舟の人の心をもみ

曉恋とていづしむ 入道前大臣信長

嗚の多かりきししゆいづしむす我身ふ志くぬ雲霧宗

むしらす 大織冠

玉くもくささるしはれさしゆいづしむしゆいづしむ

聖武天皇御寄

とくささるあまのいづしむしゆいづしむしゆいづしむ

田原天皇御寄

ふ系れよのら紫乃のあまのいづしむしゆいづしむ

後法性寺入道前実白家の百三十一の初巻恋

後法性寺たまた

くささるあまのいづしむしゆいづしむしゆいづしむ

英治二年一百首のすふ書枕恋

後鳥羽院下登

りすさる枕のゆふさるいづしむしゆいづしむ

むしらす 友原信実

結ひをく契りしとていづしむしゆいづしむしゆいづしむ

平政村の下

あつねはあまももつ海かろはよおまは神の海

閑白家百三十一 侍後行家

うらふか別とよそまをまをいふまをいふまをいふ

穿鳥意と 友原宗徳

あつて掃よとをわつ下紐とゆふ付多れ書とつて

後物意の心と 藤原基澄

あつゆつとまをれおの掃よつなつとま別とつて

道安法師

あつとまをいふまをいふまをいふまをいふ

業平のたわらよと掃とよといひけらる

よ 小侍後

秋のよれらよと一巻よあせりいし行跡とてまをいふ

元良親王家方合よ

あつとまをいふまをいふまをいふまをいふ

あつの方れ中に 友原信実御下

あつとまをいふまをいふまをいふまをいふ

あつとまをいふまをいふまをいふまをいふ

あつとまをいふまをいふまをいふまをいふ

あつとまをいふまをいふまをいふまをいふ

あつとまをいふまをいふまをいふまをいふ

そとをり姫乃々のゆりまひとよみゆらり
とさうせ給て 元祿天皇御奇 今五十八代

なつまに神乃ひひりととれひてあまの神とふた
寛治二年百三十一より寄りて

前太政大臣

そとをりひとさあよ樟らつまあくゆらけさ別給

光の宗も入道持政家百三十一より前太

お中納言定家

ひとさひよとせんこもととるまはら山杉のねよれとあ

建保四年百三十一 後二位家隆

くのちをよ入あひらひのち能とあめあてとるまはら

河内持政家百三十一より後太

おねも人のちねおさうとれ乱てほそゆらり

正治二年百三十一

慈徳大僧正

あまのまのちねたまはらとらんととるまはらの海

暁意と 祝部忠成

あまのちねあひらひとらりかあまのちねとらるん

後二位保季

あまのちねあひらひとらるん月おとらるん

前内大臣 基

忠公の御陰の月がらんきとあふく世の神のまは
芳月恋々 真昭法師

ふみも袖乃別よとあきん海よとあふく
申文の昔来よりのひゆけふといとく
あらうりゆけいゆけいゆけいゆけい

有原美方の片

久保元の家かきむせ月のあそふは空を恋ひ
定文家方合よ 坂上是則

神くまらしあ月の月がらんきとあふく世の神のまは

建保四年 壬午 大宰仲敷道親王

我がぬくもあふく世の神のまは
建保四年百々方よ 西園寺入道前大政大臣

神のあふく世の神のまは
意乃命とて 中納言

身ふくくしとあふく世の神のまは
中務卿親王家百々方より

乃々あふく世の神のまは
子五百番方合よ 皇太后殿大寺後成世

うさ物と作らしあふく世の神のまは

芳島意

前大納言為家

有_レ一_レ秋の別と_レは_レして_レ多_レれ_レる_レと_レは_レ我の_レそ_レあ_レ
友_レ尔_レ重_レ彩_レ女

冬_レと_レは_レ心_レ多_レえ_レわ_レ嗚_レを_レ別_レ一_レ多_レの_レね_レを_レた_レる_レ
家_レ方_レ合_レよ_レ曉_レ意_レ後_レは_レ住_レ守_レ入_レた_レお_レ言_レ白_レた_レ政_レ官

ふ_レふ_レ也_レ別_レ一_レの_レ秋_レあ_レは_レ冬_レと_レは_レあ_レは_レる_レと_レは_レあ_レり
百_レと_レ方_レれ_レ中_レに_レ衣_レ笠_レ前_レ目_レ大_レ臣

見_レく_レも_レ程_レつ_レら_レり_レな_レら_レあ_レく_レら_レめ_レふ_レゆ_レと_レら_レも_レ程_レの_レ着_レ意_レ
意_レの_レ方_レれ_レ中_レふ_レお_レ開_レ白_レた_レ大_レ臣

心_レの_レね_レの_レ着_レふ_レと_レは_レ程_レつ_レき_レは_レ名_レ秋_レい_レあ_レふ_レ意_レり_レん

先_レ的_レ着_レも_レ入_レ道_レ前_レ拵_レ政_レ家_レ十_レ首_レ弁_レ合_レり
衣_レ方_レ意_レ意

と_レは_レふ_レや_レその_レ秋_レれ_レ着_レと_レと_レと_レあ_レく_レら_レも_レも_レ志_レす_レ麻_レの_レさ
後_レ系_レ拵_レ拵_レ政_レ家_レ百_レと_レ方_レ合_レよ_レ夜_レ意_レと

大_レ藏_レの_レ有_レ家

福_レ意_レま_レて_レ程_レそ_レと_レは_レ心_レ神_レり_レ是_レと_レは_レ心_レと_レあ_レぬ_レ着_レ拵_レ通_レ所

達_レと_レみ_レく_レい_レそ_レと_レは_レ心_レ的_レあ_レん_レ海_レ世_レの_レ着_レい_レら_レめ_レあ_レふ_レい
夢_レ中_レ意_レ意_レと_レと_レと_レと_レと
春_レ後_レ雅_レ雅

さしねよきこみたるはさるるは若くは別れは

恋のちうとてある 小野小町

うらふこころあふあつと若ふは阿そせしのみえは

若ふは又かたひとまはばたふ中くはうたは

かそち方梅とくけけの時空若くは

今上御奇

さいつねおれし人のほいさぶ若くはあはれ

あふらん 式乳門院御

うらふこころあふあつと若ふは阿そせしのみえは

恋の方とて 土御門院小宰相

さうあつてみえつる若くは阿そせしのみえは

人のなせありける梅はうらふこころあつと

涙はこころとてあつと

紫式部

おの涙そいふもあつとあつとあつとあつとあつと

寛平山阿右衛門の奇合れ方

よしみく

秋の立すの麻入若くはあつとあつとあつとあつと

とれく物とけける人の任若くはあつとあつと

乃枯れぬ葉とあつとあつとあつとあつとあつと

竹まろむらに 馬内侍

君よと秋とまをせぬほの玉れいその松と我身は
寄るも前意 前大納言伊平

と心もぬ涙よふふのさの下業も病も知を深ん
意はれ中に 中務親王家小膳

ひさりあつてめりりあふさ命とこころよふ故はた
今上河守

けしむ人の心いふ川も我り意わらとこ
百もふれ中に お内大臣基

河をさる雲路の星は教くふくね河も道色おまそ

光の筆も入る前持政内大臣乃河百それ方
よる前の意 前中納言定家

わらもそ袖のふりも教り今も我身よせとこ
意介のあまこいゆひかり

くまらわん命もはふふらむ是よりまはる月日は
世所まののちと結とまをきく教りやま

こもそは色ゆさるふれい又の日はをせけり
天曆河守

神もこのまともみえはまの教とあはれみ
梅家侍路河丸

續古今和歌集卷第十四

恋年一四

むしらす

ふん人ふか

わ玉の年れみとせと約して毎こよひより新枕とれ
光の夢も入道お扱政家十そ方合よき

枕恋

前中納言定家

三つあふみとせ乃ほれ新枕さむりられ月日ありた

恋方中に

お大納言光頼

そよと心人そつ〜〜ぬれし昔乃整りかへん

八条院の余

と〜ふみのうられあふびと〜〜昔のむ〜〜

藤原門院少将

ゆふ道り〜〜の〜〜と〜〜人のれあすな〜〜

藤原伝実頼下

い〜〜と〜〜の〜〜と〜〜と〜〜あ〜〜らふ

源雅言朝臣

と〜〜と〜〜の〜〜を〜〜たのめぬ物〜〜と〜〜

大江忠成朝臣

夕〜〜の〜〜は〜〜お〜〜と〜〜ふ〜〜は〜〜ら〜〜

恋方中に

権大僧都定因

思出てはうたりるれきこよのほ昔やはけしとぬん
冬恋 友原基徳

袖わつねの麻はむひるよといふそてもわすれ
六帖記方中に 前大納言為家
言ゆれぬのまゝもたのぢりていふぬいさか
女しあらしふりのやもろくふしとらまう
なりぬいさかていふいづらまう

中院侍後

わらふはあひくもくもくまふまはれやいさか
記しらす 中務親王忠小膳

うじやまそふ人のあはれ恋いさか
百三十一方の中に 前大納言為家
恨てとあまろけふかいらむ恋いさか
恨月恋いさか

侍後行家

なふとら我身とをまそわはれむいさか
子五百番方合よ 坂京極持政前を政大臣
あせりや恋いさかめだれは恨いさか
記しらす 侍後行家
志願乃あまれ恋いさかめだれは恋いさか

さきこの櫛あつりのの娘とまらぬ糸女とて我とあり
百々方れ中に 後二位家澄

をのつゝふふ新よれ着あえそはくまふ月をれ
書と 権中納言四信

さしわりのあつむらとくさくさつと月を我とてい
天徳元年内裏方合弁

中務

いさふ雲かの月とぬる人恋と影やそいふ
急方あましくいみゆる中に 前中納言色家

いさふ雲かき出て出る月影のいさふみ良よれ
過不意と 入道あそ政大臣

逢せぬ新まら月のはかして故思ふと形身は
後鳥羽院御弁

うらさく人のいれあさねとたふさくふとねあき
前中納言定家

何らさあくなふと身にそふ面影うそれもみえぬ
建長五年二そさうよ寄書と

院大納言典侍

面影いさくさくさくいさくいさくいさくいさくい
まられ神のさくい

むふ知

栞平人丸

多道うも我とてみん下ひの結ひもあはらざる
心は石まともて鉛水あつても色何しともさふ
寄し松意と

望む后交を更後成

ゆりもきううたの松とあはくうう人をたのん
後系栞栞政家百そらうよ

高松院右出つ依

我らう契り志は昔かいつとと人よみええ

芳竹意とつとととをせ給ひら

土御門院水奇

呉竹のうれ契と志はけりまふと志をええむい

は成寺入道前栞政けりともねとつらうり

けらるふ

堀河院右大臣母

けりとも志とやねのふとつらうのれよ生る何や

二日とつらうあつらひらけら母は五月あつひつ

ととと

實り朝臣

あゝまれけはたつらやめ弟ねのふらうのけらる

た百女のりつらつらつら

道信朝下

俺おまはつらあつねとあやめ弟おまはつら
はつらつらつらつらつらつらつら

後涼殿の爲らむとせられたるはとての草
とやふとてせらるるて約けしとてあり

業平御下

忘れ弟はつとせられたるはとての草とての草とての草

百とての草の中に 式子内親王

君はとての草とての草とての草とての草とての草

御下

忠方乃の中に 中御云家持

我門の世に秋藤らとての草とての草とての草

在原元方

妹萩の下とての草とての草とての草とての草

芳安と草ととての草と

後惠法師

日ふとての草とての草とての草とての草

曾祿好忠

ゆくとての草とての草とての草とての草

御下

は中御下

我がとての草とての草とての草とての草

袖為義朝片

ふるとての草とての草とての草とての草

寛治二年百とての草とての草と

さうし川にそゝるわたりそめふ阿うや琴り一歌の
今よ給せけり 延長御奇

しよのたれこころなほあつ意のこころはねとつ系
寄島恋と 待賢門院堀川

らふし人こころまそくあはれひとこころあひ
考心恋とこころと 去御の院小宰相

そく恋れこころこころあひらりやとそん人れよの
寄野恋と 入道おと政大臣

あつと涙の露しじあこそ月と寄野のあつこ
寛治二年百三十一方よ寄忠恋と

前代大臣

月をくつてけしこころ寄野の世たのまこね人ふと
女とこころこころいつこころけり

業平朝臣

吹風よその様いらすともあつたのこころあつ
恋しらす 小野小町

武彦形ふけしこころけのそめあひめ弟とけ
お右大臣忠

お後の言れあひこころあつこころえてもゆふこころ
式子内親王

年つとむ程をこころをなすやうな命あり
急方れ中に 藤原門院少将
それとあふのまは命をこころをなすやうな命あり
遇不逢急のこころ

た道中将公卿

あまそとこころをなすやうな命あり
平政村下

あまそとこころをなすやうな命あり
光的家も入道前按政家急十首命
よあつらひ急

正二位家

あまそとこころをなすやうな命あり
急方れ中に 後二位家

あまそとこころをなすやうな命あり
中務親王

あまそとこころをなすやうな命あり
建保四年百首命

光的家も入道前按政家

あまそとこころをなすやうな命あり
中務親王家急方れ

前中納言定家

まのの着ふまさりて物そふちのふみは月命の
建仁元年二月五日撰方合ふ遇不意
後京極坊改おと改た

三つうこぬよけうこやうそへも程のれ月と神
建長二年の九月十三日十首方合ふ
恨意
新院少将内侍

保くもあえをばふとこほみよれ月のつこ
部
菅原孝標のト
表又いつまのよめりをそありちの月とみ

山一院
つ
松川
式子内親王

ふきつひ月ふとこひんこを物のはそ
志方中に
安家の院
前大納言忠良

とつふつそそ人いけしとひもそ
はくも程うあらけり表ひし世う
家十
中務の親王

今又けふみえぬ人ものこは門の海ありたり

貞治二年百三十一寄御意

藤原隆祐御下

み入ともあまこいぬあまらたれたふそ神よあまこ

あまらたれ 有原信実御下

てふあまらたれいひうたれ持らひけい中のことをさあ

寄御意 後三位隆朝

まのうれは後乃つち橋はきこせとつじと人々御下

寄御意 土御門院小宰相

よひふらうたれあまのぢきあまをたきこめてあま

急方中に 平政村御下

海うらうたれあまにあまのあまあまあまあまあま

小町

たうまていあめあまあまあまあまあまあまあま

後二位家隆御下 後三位泰光

みゆけり

あひそもたれあまあまのあまあまあまあまあま

急方中 醍醐入道前太政大臣

うれあまあまあまのあまあまあまあまあまあま

急方中 六帖御下

後出前内大臣

伊をいぬるおまのりかたにいとせしむるありまを
弘長元年百三十九年不意

意まゆくみかよのし舟に色かきしひだのさりて
形——らす ぶん人あか

けりみあさりふ出つたまあて身と信てし神おき

小町

人心我身はけいふあまのりかたにいとせしむるあり

小一条共清よしつらける

安方部下

めまよあえしむるおはしむるかたにいとせしむるあり

恋方—— 光のまもる入る前持政大臣

けい——のりかたにいとせしむるあり

安方後志意とつらける

侍従新家

りかたにいとせしむるあり

絶意 前内大臣基

信よかたにいとせしむるあり

形——らす お中細云光

あまのりかたにいとせしむるあり

西行法師

ふんせいのしほいあはれまふらふらよこし物あはれ
まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ

曾孫好忠

君よふらふらよこし物あはれまふらふらよこし物あはれ
まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ

入道前太政大臣

まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ
まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ

部一らす 伴幾

まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ
まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ

清輔卿下

まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ
まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ

意の方中 檜中卿云通俊

まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ
まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ

正二位左大臣

まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ
まほしき人のまはあはれまふらふらよこし物あはれ

高松院右兼の依

あふれぬえい命とくえんといひもいふ所は

土御門院内侍

あふれぬえい命とくえんといひもいふ所は

百首山方の中に 順徳院内侍

思ふよ本殿の下なるあふれぬえい命とくえんといひもいふ所は

空水念と 修明門院右兼

あふれぬえい命とくえんといひもいふ所は

建長二年吹回して十首山方権一侍

とくえん 新院内侍

あふれぬえい命とくえんといひもいふ所は

新院少将内侍

あふれぬえい命とくえんといひもいふ所は

中務親王家百首山方中に

土御門院小宰相

あふれぬえい命とくえんといひもいふ所は

五十首山方中に絶念と

右上天皇

あふれぬえい命とくえんといひもいふ所は

中務親王家

らひきりしむる事なれどもおのれもいひたえん
心う後刻哉

なりきりしむる物なりけりしむる事なれども
中務親王

志事おのれもいひたえん事なりけりしむる事
後二位朝臣

志事おのれもいひたえん事なりけりしむる事
素還法師

志事おのれもいひたえん事なりけりしむる事
三條入道大臣

志事おのれもいひたえん事なりけりしむる事
右兵衛督為教

志事おのれもいひたえん事なりけりしむる事
室太右衛門守俊成

志事おのれもいひたえん事なりけりしむる事
平政村部

志事おのれもいひたえん事なりけりしむる事
筑前守

志事おのれもいひたえん事なりけりしむる事
筑前守

恨意のこゝろ

式乳門院御運

ふふりつ昔もいふくさうさういふ心してふかき御作

被忘意と

前お殿た昔未嘗お殿教定

ふふりつ我身ふつふむくい何んか建あきふし物や

鸞目院梅系使

うんをふんさきふんし契とほむわつ物やねりいふん

中納言

らふて命ふふてふかきうん我ふい身もやふん

中院侍候

身ふじつふんいふわつ物やふんきふんいふ何んか

は京極持政家百三十一

小侍候

ゆんも着ふんいふふあふてうんいふ何んか

紫式部うりふんいふふんいふきふんいふあま

さういふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

よほりつきふんいふいふいふいふいふいふ

おろいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

むす

は紫式部

新指の法弟はゆふりつあふいふいふいふいふいふ

部一らす

西外は師

ふきとて思ひつゝ我身ふがふと人の恋は

恋方れ中に 坂高羽院御前

秋風よあひくささのこころをくさくさやん

中務の親王

まふとてくさくさの秋風やまじくふあつりあは
恋とて心と誰よこころはあはれふあはれふあはれ

義暦二年四月内裏方合弁

前中納言進房

こいこ今我身れつゝこころはあはれ人の恋は
むしらす は橋原昭

あらしとてわらわつゝあはれ恋りあはれはきても恋は

前大納言進房の家方合弁の恋

前大納言進房

今とて恋はつゝまてららむとては橋とてあはれ

恋方れ中に 中務の親王家御前

今とてたのめ^本ふらふけつゝこころはあはれ

洞院按察家百々小遇不逢恋

信実御下

あはれとて恋はつゝあはれ恋はあはれつゝあはれ

子丑百番方合弁小侍垣

續古今和歌集卷第十六

無傷可

久安百三十九年

崇徳院御奇

かきよむあつ川のさうらうきそ程あさ世とて
万葉乃方和しけり次よふ久約き

源順

世中とゆよゆらん風吹の秋来りしあはれのこと
むしらす 菅原孝標朝臣女

何ゆと我あきらんけりあはれしと常あは
ま

建皇子の事にて今城あよむさあゆり

たけさゆてしうませあまつりき

天明天皇御奇

いまさうらうやまはれは雲よもあきとて
天智天皇の御孫のりしうませゆり

後太皇

今いさひやむもまろくけふみえは
延長元年三月文彦太子のりしうませ
ゆりしうませゆり 延喜御奇

まふら山様もらりあきかふと常あはぬ目と

或部に教をのみこたけありて志を
無補しうしてゆるむるのみ

三條右大臣

まこといひらうとも言ぬれ又あひいひる人のよそよそ
延長八年九月右近府右将曹司よいて
させ給けり時世御文衣みかゆりしく給れ
いふのつらひおきや〜にのさるをゆるけり

延長世御三條右大臣娘

秋風よあふふ木の葉をよそよのらり〜あそぶ
あふ〜孫周乃はよそよそつら〜けり

中納言朝忠

あふ〜を従ていふふあふ〜らふふ〜あふ〜や
返〜

藤後好古

あふ〜いそわぬ〜あふ〜のおふ〜あふ〜ゆ〜あふ〜
右大臣将光圓とゆりてのら〜あふ〜さ〜
のら〜あふ〜けり〜あふ〜ゆるむる

紀貫之

思あふ首の露もあふ〜あふ〜のむ〜あふ〜神のあふ〜ん
あふ〜あふ〜く〜れてのら〜あふ〜あふ〜

清信公

月々不杖よわく様元をより卯の露やをえん
天曆御門乃由とよいしとくはげえや
いよ女ふたれいといふそくて

宣耀殿廿一

そとそてもこえを物とよその心さるあつと何物さ
一条院乃由のわら上東の院拈把の
いよ拾げり日よみゆを

紫式部

わじよと若よむて後山を向ぬをそはらけ
皇后文 皇子乃故のわされ新言なりゆ

きふり

儀同之司

惟もみか清沙るこ身やねとゆきこれお君そ
とひよゆをうはとさりけり人のりといは
るしけり 大皇后文奉事證四

まぬり歎くとるぬ人らとしそそいきみそつ
女のといよゆをうは石いよ海とてこみ
ゆけり 権大納言行成

都えゆき人もねりえと山よりさくやまは
贈皇后文くねるまの比山れすこし
らんして 堀河院御奇

梓弓とるれ心乃すむじう急き人の形身ありた
後鳥羽院のくまゆりくろは

順徳院御方

のやりはまは衆とまふまを深々なれもこは
大原よたごあまらうしういこえけあに

三月の勝れ志あふあてしおふこひひとと
まのよたごあまらうしういこえけあに
堀河院のれゆりくろはのららふん
けうしけう 中宮上総

ありせれあふまふいあふれまじうひてねとの
れ心よゆりくろはに僧正遍照うひら
乃あふれこくろのらりけうまみく

津守國基

わうふさよまにけう様れあれしうれまやあ
九条たごはうせくろあめらけうらあり
まらとんて 心海上人

けむつとあはとるるれあふまひらう様か
建保百さうよ 光の若も入る前接段な
孫まはくやのれ枯しあふあはれあ
後京極接段ふとこひそふの遠忌乃日

光の孝寺入道 千時のりのりつらけ

前中納言定家

冬道と云ふ月日 おひつ 光の孝寺入道お授け

子しは多の月日 おひつ 洞院授け

お右大臣忠

初 おひつ 道念法師

待賢門院 おひつ 待賢門院

堀河

前中納言 おひつ 梅吉法師

のり おひつ 前中納言

入道前を政大臣

今も秋のしるしあり白露もさうさや今も神あす
を

今日までとうれい身ふさふさしるるをさへせぬあはれ

出乃あくとときで 雅成親王

ふよあつ葉れ中あつ蒼いつまで露のさよとすん

むしーらす 設富門院大輔

清おと露のさるれをさふあつさのせつれ葉あはれ

人ぬらけつみく秋あつさのさるれをさる

た道中おと謝

今もさく昔れ物わねあつ時あつのとさく秋風さく

わさかときえ 前大納言云任

あつさくね露のせつあつふさふさあつさくあつ

つさくときえあつ 侍僧門院権河

さつさく月よんあつあつさくさくあつさくあつ

定家十三三年ふ前大納言あつあつあつ

さつさくさくあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

昔わつし神神あつあつあつあつあつあつあつ

家隆つら十三年ふ澄祐あつあつあつあつあつ

奇ふ

平時直

ししも即ちまゝにけしきありけり故よまわさる
皇太后御父上皇後成定家母のたより
よそゆけりけりといつらうとせり

は橋形昭

ふりさたりけりあまをそそ給ふまの我神のたまふ
養福の院之れ給へりけりけりけりけりけり
けりあまをそそ給ふまの我神のたまふ
けりけりけりけりけりけりけりけり

皇太后御父上皇後成

なごきかてさつひふりけりけりけりけり

返

前大納言成通

けりけりけりけりけりけりけりけり

けり

後二位源氏

けりけりけりけりけりけりけりけり
式輦門院之れをせ給てのち小白河を
よみ給きり

御連

のけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり

惟宗忠宗

そく病といふ事ある事と有る事ありては
宣陽門院之れはを給よげん
くまは身見ふまらりてよと給きり

後三位忠憲

友家神なりとてまじりては
その聲ふたきあをきりてをりたまひて
神よりみられりるるといはれり
み給けり

源仲宗

涙のこころはとてまじりては
母の身ゆりりよきり秋の言ひ人なり
なり

げんをりよ 源兼氏親長

新妹と命ゆりりたのめも人なり
いりよの身ゆりりよきり
とたあてよあり 道命法師

むしらす 高弁上人

つらぬ母の身ゆりりせり何ふまて
西行法師

作とてとあつたふりては
院人細玄典侍

大正運衛船長

くまひひそくし雲深の社を何ぞしたまふ海を
後堀河院の道始より一町よとのつこく
くまふ年へくつよそのちななううまて
此へ下けよいりかんくつら一けり

右共清徳善基氏

夜とも夜も七捨一母の形思ふよふくつる雲深の社
都ふ知
物さ宿の梢よりみらう海とさふ海とさりたれ
よれううたきいともさひけきそ音るあ

あふき改上人入りつら一けり

開白前たふ后

くまふそと海へぬともさあうつらあれねとつら

返一 廣政上人

くつさゆつ物ともさあふき改よふらうりさうなまふ
九条たふ后とせくつこの年たふあおあ
月日ふあう阿へあ音ふりきうふたふ
徳忠基りいりつら一けり

前権僧正道玄

まのうう昔れはあきれたるをいんくねけさる白書

あらしのなごり人の心はさびしき心なりを松を
眼をさしつけり日あり

源後頼朝宛

みそはてなごり心はさびしき心なりを松を
あつまふ侍をさしつけり日あり
よけり松をさしつけり心はさびしき心なり

友原純宣宛

あらしのなごり人の心はさびしき心なりを松を
あつまふ侍をさしつけり日あり
よけり松をさしつけり心はさびしき心なり
一条院皇居宛

あらしのなごり人の心はさびしき心なりを松を
あつまふ侍をさしつけり日あり
よけり松をさしつけり心はさびしき心なり
西園寺乃漸く心あり

入道前を政大臣

あらしのなごり人の心はさびしき心なりを松を
あつまふ侍をさしつけり日あり
よけり松をさしつけり心はさびしき心なり
隣寺よ備後の人なり

天台座主澄然

一翫れ種のをとそ暮るいふゆゑのたつらぬん
八十ふおやしくりてむとをさうく
てゆくとそひくくよみゆけり

信實御代

つゝのたつらぬんをさうくよとそつらふらけり

曉乃心をさうく 雅成親王

我ら又むらとそ暮のゆめまにあり嘯と名はつ
和方御代を述懐方合ゆけりふ

泰後雅經

ふくふをたつらぬんをさうくよとそつらふらけり
ゆとらむいふすたりゆけり此御
徽子御代のりつららむとそ

天曆御代

ふくふをたつらぬんをさうくよとそつらふらけり
ゆとらむいふすたりゆけり此御

ゆとらむいふすたりゆけり此御
平重時御代ゆりてのら佛事あり
とむふりけりふ平長河ありつらむ

中務御代

こい出るきりしをばかしくもてしるはう波をぬくも
又て身ゆりてのりよめゆけり

前大納言基吉良

なごの母のしらねたおまことさぬお別れ程そめい
部——らす 正二位知家

ほのおゆきの別れを物とてまてさくはゆり
糸後成程身まうらふけまいらさぬ
しとたげさてしゆみゆき

おたふ末總惟方

さぬわいらさくふそなきし道老てとくう老ぬい

よのうらなきいよとさひてある

貫之

ふしたまふさそも物と志わ身のをそ世りけ
月の兼さ弁上人のりいまうりて教
のめたとあたたひよやそゆけり
身ゆりてほそのみりのこりあひ
そがかの月日ふ何さうけつとれを物き

兼又上人

めらりあ昔こり秋の月あいらあお我ら
部——らす 西行法師

ふふあなれなるいひの申すはるん

ふふあなれなるいひの申すはるん

續古今和歌集卷第十七

雜奇上

文永二年七月七日白河にて詔とさるりて

七百三十九人ふふあなれなるいひの申すはるん

春とふふあなれなるいひの申すはるん

初言とふふあなれなるいひの申すはるん

入道前太政大臣

君ふふあなれなるいひの申すはるん

百三十九人ふふあなれなるいひの申すはるん

正二位知家

きやうのいふ身そふりまらわらわら玉もあつたあつたあつた
述懐百首そふりまらわらわら

皇太后后多事後成

去日誓の松おろえのふらふら子自ふあつた

家とよめ 人丸

まじりてひびくふらふら去家たぬといふく

僧心通昭

足安の山よ今やせり世家もあつた

洞院接政家百首そふりまらわら

前中納言

とらひていふらたれらひて去の家たつた

前内大臣 家百首そふりまらわら

前参政忠定

けしやあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

去 土御門院忠尚

家よもゆの松ゆひたりあつたあつたあつたあつたあつたあつた

大社 家百首そふりまらわら

後鳥羽院忠尚

庭とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

庭の柳と

花園たつた

志がそいあまの約とみゆわのなふくろくま柳葉

まゐれんと 前大納言基良

春雨の何まのこみよあくこたのむおろか神樂

部一らす。 前内大臣基

弟と本も何よあひくろまゐりのこくろ神楽より

枇杷殿のしめろ花あらなりけりきみ

よみゆけり 民部卿長家

花の巻れ白ふよおのほらふらまや昔たしこみん

じりんゆけりあめしめと内裏より

らまきろくともくこくまゆきろ

馬内侍

宿て白ひたろふ梅も昔こまぬくもあ毎

部一らす。 大兵衛高定

袖あまはたきろくかん梅花立よりなもくま

前参後忠定

いふあてまの光もたぬあふくろ月の袖も

順徳院御方

秋風よりうらあけのま生面乃杜れまのゆか

土御門院御方

ゆが宿まの誰ともくこくまゆきろ

堀川院御時百首よ

友原基俊

世中いづくにゆく御時御時ふたふたのいづくにゆく
待花んを
入道おとせぬ

幸ふとせぬぬ老の身れつとたのそむとつらん
三百首方中に
中務の親王

花さぬとれつとこれ花もに梅とみまてくは白雲
前因大臣 基家百首方合よま二年

関白家茂部

月さぬいよあふれつとあふれつとあふれつとあふれつと

中宮太政大臣

郭公忠ひつと一智と今五月とあふれつと
而中郭と
道生法師

あふれつとあふれつとあふれつとあふれつと
郭
貴

あふれつとあふれつとあふれつとあふれつと
堀川院御時

あふれつとあふれつとあふれつとあふれつと
人あふれつとあふれつとあふれつとあふれつと

和泉式部

前中納言定家

玉群やふるもらも河をみくもらぬ中か五月の
都一らす 藤原門院少将

さひ川の成びの五月のよせあそともれ園とあそん
祐盛法師

五月のよみまらるとしてさあまはしてそ海つこの海
雅女親王

さしこれのつはれおきあそ川あそ園とらせ
海島五月雨 後二位家澄

中りふとがくもめじつり人の神やわとらんありぬ
都一らす

五月の晴のそり何そそのあくねとさ
百そ水の中い 土御門院中納言

あつ神の白いと風のほそひとそ花橋ふるやそあきん
ひくと花橋よまのひてんゆくとそ神のそれ
正治よあそよりけり百そ水の中い

兼書法師

朝らつそ花橋の白いとそ神あよのあひじつあ
守覚は親王家の五十そ水の中い

皇太后太后手後成

白くは新橋乃神のいふこと露げさうさゆの夏
千五百番年合り

二条院禪波

多きりつを橋よくとて我も物ふけさそて我

毛ふ知

慈鎮大僧正

乃神のいふこと人あつた新橋よ露そさつり

大納言権人

そらたれらる黒部さうこといふつあぬひあ

順徳院御命

よりとくこといふこと何きぬまらけ二村のいふこと

正治二年一月一日

前中納言定家

いふこといふこといふこといふこといふこと

鴨河く

後之我あふ改る

いふこといふこといふこといふこといふこと

寛和二年一月一日

権大納言新成

いふこといふこといふこといふこといふこと

夏方中に

中務親王

いふこといふこといふこといふこといふこと

前田大居士 甚家百首方合下

齋司院師

とくも花も長らるらんけし 都をさへいそむ世にのこ
百首百首方合下 月りけりふ治世と

侍従新家

とふ雲のわねもくねおの下り 蒸乃福の心

夜方中に

深室の女

夏のものまらん人のあき松乃戸もあきあき 松乃戸も

中務令婦

月乃山と松の松乃ととりあはす 月乃山と松の松乃ととりあはす

夏月と

入道前太政大臣

ふふふふふふふふふふ 松乃戸もあきあき 松乃戸も

貫性法親王

山乃ぬふふふふふふふふ 松乃戸もあきあき 松乃戸も

前太政大臣

鳴乃元とふふふふふふ 松乃戸もあきあき 松乃戸も

都にらす

故為藤院卿方

なふの福乃葉そふふ吹風よ入日涼ふふふふ

家百首方合下

後京松松政前太政大臣

たふせふふふふふふふふ 松乃戸もあきあき 松乃戸も

なりとてふるはれゆきまふもきあふふあはれ
建保百三十九年八月一日

前中納言定家

あす川ゆきの波のみを承てまぐさ奉れ
なつすゝめ

續古今和歌集卷第四

秋三十一

殊立日よみゆけり

中納言家持

河のまの船そと心へ衣もふ吹く風の色を
百三十九年八月一日 順徳院御前

かきりおきおほふまらる病は朝れ志のふれ
建長三年秋三十一日

入道おとせ

白鳥乃玉とてよの浪葉原風よりしきに秋をひかり

しつらひ疎くぬぬ日くじの鳴ふけり秋の山を
嘉保二年郁芳門院前載合守に

権大納言云々矣

まふとつひおさのぬぬ宿中いそそくや秋の風

秋乃由方れ中に 今上御守

煉きていこうをくれ吹風のそとにけき庭繁

東三条院昔清依

身みじひつぬぬみのけいこもそそく悲ふあき秋

中務つ親王家百そそ方

平政村綱信

ぬきかそおさの上葉とふけりけいけいけいけい秋風

秋守中に 安法く師

新の葉にそそくそそくそそく吹風よあつて秋や露と

後鳥羽院より 縣十そ措方合守

後二位家澄

秋風はそそくやのけいけいそそく新の葉とあつて

子五百番守合守

後鳥羽院御守

うみかそそくそそくのききそそくたのぬぬ宿は新の上風

百そそ方守に 土御門院御守

夕陽の籬の萩と吹風のあふみの秋と
女御殿子女王

あふみの萩と吹風のあふみの秋と
朱萐院河内姫人取の方合は萩と

よき人ふか

あふみの萩と吹風のあふみの秋と

萩風と 天台座主澄寛

あふみの萩と吹風のあふみの秋と

秋分中に 紀友則

あふみの萩と吹風のあふみの秋と

よき人

あふみの萩と吹風のあふみの秋と

あふみの萩と吹風のあふみの秋と

七夕の夜 小野贈る政大臣

あふみの萩と吹風のあふみの秋と

七月七日東之条院より

上東門院

あふみの萩と吹風のあふみの秋と

水邊事 東之条院

あふみの萩と吹風のあふみの秋と

建保四年の百々々秋奇

光の宗も今も折段の宗

光の河雲の宗も折段の宗はゆきあひとまらざるの
指

セウの心と

素還法師

五河の宗も折段の宗はゆきあひとまらざるの

光の宗も折段の宗はゆきあひとまらざるの

正三位知家

光の宗も折段の宗はゆきあひとまらざるの

弘長二年百々々秋奇

中務の親王

光の宗も折段の宗はゆきあひとまらざるの

西院の宗も折段の宗はゆきあひとまらざるの

よ

六条の宗も

光の宗も折段の宗はゆきあひとまらざるの

題不記

康資の母

光の宗も折段の宗はゆきあひとまらざるの

光の宗も

大藏の宗も

光の宗も折段の宗はゆきあひとまらざるの

秋乃の宗も

今上御宗

光の宗も折段の宗はゆきあひとまらざるの

中納言為氏

あまの川いふあまのこてせりれ年ふりせらるるはる
天台座を主澄貫

その川みられ格や格とて海とてあまの綿の足
子五首番の合ふ 前大納言忠良

竹の葉よ何とせし糸やせりあひしはあまの乱
せり別と云とと 大進大將家雄

あまの川鳴やまのうらさい又あまのうらさい
せり後納言 大進大將家雄

あまの川いふあまのこてせりれ年ふりせらるるはる
天台座を主澄貫

先の事も入道前格政家株二千そつろよ
関白あたたま

あまの川いふあまのこてせりれ年ふりせらるるはる
天台座を主澄貫

秋篠の露よ月乃やととと
後杉納言

秋篠の下葉よ月乃やとととすあまの露
式子内親王

あまの川いふあまのこてせりれ年ふりせらるるはる
天台座を主澄貫

寛治二年百首より萩露

鷹司院梅家

とむふたの秋露露けさなれりまらる宿の地
十首よりあてこつりせり時

亦た大臣

独わらぬ秋の梅風よ下葉を付庭の萩

むらさき 人丸

萩の露らふ行き秋のあきりかありそあれ付きて
有る意女所乃前裁合のふと判せらる

とてよませ行けり 延長河奇

萩の色いさかふふみゆき秋乃らふひつるあきり

秋乃聖原れふふとるん

伊勢

咲もよれもゆめ秋のいさかやまの海にほし

草花とよみゆき 中務の具平親王

夕暮よりのふゆきをいさか我よりはきは露やむ

俊恵法師

何よとあふれよの世露花のいさかよて露ける見
中院贈た政大臣家前裁合女所也

よみ人へらす

たひくもくみりらん母節もあつていそ風もあつた
あひまの山方中に 坂巻羽院御奇
をいふたの杖も露もあつてあつた言はれりゆん
建長三年の九月新伝方合よ朝系歌とふ
しとふ

た道中將御年

白露乃降まらば雪の世節歌あつてあつた
廣義公家方合よ岸巻秋歌

紀時文

ゆきよ影とらせるといふとあつたあつた
長久二年八月松尾社よ新音ゆりつと

まふあれ世房車ふ草乃歌とらして
ゆき雪のさくはらふよあつてあつて物みゆりつと
を来司あつてはらふとあつてあつたあつた
のりまよらつてあつてあつたあつた

中納言資徳

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

弁乳母

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

題ふ知

清原深書良文

新羅風よふいそ部をいじとひとほして露やとえ
中務の親王家百首より

中納言

物ぶくの袖よりねた露けりきり親とくきこれ
六帖むよく方よりみゆり時節と

太上天皇

東とくまのあつらふうをさえりいあ露玉のた
建仁の百首よりみゆりより

後鳥羽院文因

とふあたりはゆいほほとておもふより積

秋方中より

中務の親王

新羅あかりの燈いそ衣被ゆり輝をせそゆ
着海よそりよりおもはそとふとまお物白

百首中より

後鳥羽院御奇

そのめと整りてはもろ様よあかつかつたあ
建保四年百首より奇合より

前中納言定家

ねそそり通ぬる物露そ葉被社の志りより
部よりす 土御門院小宰相

たゞふく何道やそん有る由わさるあたる白ひと

ふ山の陸津奇

病乃おきつるふとそふ有る由秋風まて作ふさ
久言ひしつれ宿の三つ露もふい何道や神よそえ

百首方乃中に 中務之親王

いふ世人露かゝるそ秋風の吹よつまそしめかた

兼久元年内裏十首方合よ秋夕露

入道前を政大臣

吹りぬ露おれ風のり言も神よと何れ秋の三つ露

れあーらんよあ

権入納言形頼

秋夕露かゝるそ秋風の吹よつまそしめかた

寛治二年の百首よ秋夕露

正三位知家

この秋むせら何事りふ露そと老やりる家とあ

日吉社百首方よ 慈鎮大僧正

り年よ言鴨あつ澤の三つあふひるも神よそえ

秋夕を 前中納言定家

秋よあ露そとそ出あはしこの里れと乃りたが

建仁元年五十首方合り

後二位家澄

りてくさひに物さほのくみりて居のさし秋のつれ

建永の比に秋のつれよもてまづせ給けりて千

その由方中に 故き御院御奇

おぼえしよるまの輝のりより 露と物と被のり

三巻の若のけちとあしてを程とて何れ秋のつれ

建仁の比におもてまづせ給けりて百

御奇に

彼の露とつれよもてまづせ給けりて何れ秋のつれ

秋十首方へつれよもてまづせ給けりて

申くは風とてをぬりて書れよと輝のつれよもて

野にらす 権大納言教家

りて書けりて成るのつれよもてまづせ給けりて

中務の親王

神の上とてまづせ給けりて書れよと輝のつれよもて

光の若も入道前持の家秋の十首よ

前関白たる臣

何れよもてまづせ給けりて書れよと輝のつれよもて

寛治二年百首よ輝り

入道おを政の臣

けしきさふらつ海ふつりつ時そ秋のゆたれ

秋方中ふ ち上天皇

我らさしきわぬはささ武あささ河の林あふ

月花門院

いねさいりまわぬり言風山秋のふらん

前内大臣 基家百々方合り

土御門院小宰相

海山秋の物さつありそらささの袖ぬらん

近ふ知 平重今朝長

今よりささひて物のほくらあてささ輝のさ

信実朝下

物さのらと思平ささのさささや秋のゆた

右近中将云雄

吹風ささて物ほささ河ささあさささ秋のゆ

平長時

らささいつさあささささささささ輝のさ

百々方中ふ 右近中将平

そのさささ物さささ秋のゆたささささ

藤原門院少将

時ささささささささささささささ秋のゆ

守元は親王家の十首より

皇太后后文を奉後成

秋はれつ女阿そわきあぬ聖原の忠と露よ鳴也
三首首よりの中に

中務の親王

露よあつたつあつりて露ありくとたつち秋の涙よん

天禄二年八月野宮より合弁

總子内親王家供了

後弟生の露吹じと風よこされても鳴出れ急か

百々よりみゆりふ

衣笠前内大臣

夕風もい露ふさおす秋風よこして急いこつあ

秋の此方中に 坂倉御院御弁

里おまらあつりのあつりせし月乃てあつたあ

月とゆらと 後二位親政

そあまら山のゆあつと急いすんやあつた月とあ

文永二年八月十五夜乃方合了未出月

其上天皇

あつた雲しのもすあつて風と月とあつたき成ふ

兼久二子の内裏よりゆ月とあつたあ

まらりける

正三位初家

みづのたのめてはまじりてつらきとみまはるるの舟

正月をよめる

もてし雲おつらふとよふれりて出づ月とみ

洞院持政家百そま月

後二位家澄

けくねの山をれはるます鏡をそ出らあまの月

後鳥羽院よあそまらりける百そま

入道左政公

まのわが河津の雪かや晴あらんまれのわがと出づ月

月をよめる

光俊朝臣

はらりゆきそとつ月をよめるわがと出づ月

題不知

前内大臣基

わがあゆつとあまし雲をそとひらりる月

後鳥羽院御年

富士の月よ嵐やとぬれ神をそあまの月

位よわらへし時月と出らんそよ

廿物ける

崇徳院御年

これとて雲かよとてひらき雲よ月をよめるの舟

建保六年秋庭月と出らんそよ

つりきり次よ

順徳院御寄

ふわふわ清土はむく火もたぬむらさき色に秋の月影

湖上月と

光の字も入道前按段の御寄

はははとふみくはま守りてんきとすあふ然の月

月百とつらよ

前入納言忠良

いふまじいよ海の雲屋とりつ月影のけしきふあふり

海邊月と云と

源仲光

紀のころやゆれみさる月とよきあまよせとらたき

鳥羽と望月

太上天皇

里のころとくくぬ心機りともふあひい人様の月

建長二年八月方合ふ月前風

入道おとせ大后

とよ月の風すまほしく海を渡る秋ふとちかむ花の上を

法性寺入道前関白家おとく

源俊賴御下

おちるふいりり音はえそあそこよひの月影あとの見え

文永二年八月十五夜方合ふ月

鷹司右院御下

水の面より長秋乃月影は見えそとそあそくあそく

月照流水とあふと

登蓮法師

月影とありとみくやとあはれし若りつゝあはれをせうせいの
と御門右大臣家より合よ秋の月

侍従乳母

のうしろのあはれ雲晴ていつとよき秋の月

鳥羽少輔池上月と

京極前関白の政大臣

ちかき池のわたりとよきあはれとよき秋の月

藤原一守約けり秋の月と

僧正行意

いづれもあはれとよきあはれとよき秋の月と

聖外月とよきと 法平実伴

雲とよきあはれとよきあはれとよき秋の月

弘長元年百とよき秋の月

入道前太政大臣

川のわたりあはれとよきあはれとよき秋の月

海老川月と 平政村部下

風流のゆきあはれとよきあはれとよき秋の月

浦月を 権大僧都定因

あはれ屋の浦月の波枕屋とよき秋の月

友原信実朝臣

なふきやあひやうくわじこくは浦をくすま月命
河月と 平時直

なせ川をくす月乃新をまひたりては水風治
野一とす 大納言隆信母

乃乃人の心やふりくまそ月乃新のこまあひ
千五百番方合り

前中納言定家

ふのりやこまをこくまそ月乃新のこまあひ
乃乃川の中は 後鳥羽院御前

あらしさくははあひつさくあやからぬ心も
月五十五番方よみゆきなり

後鳥羽院御前

あらしさくははあひつさくあやからぬ心も
月五十五番方よみゆきなり

慈鎮大僧正

なせ川をくす月乃新をまひたりては水風治
建仁三年八月十五夜和方取月命

前中納言定家

あらしさくははあひつさくあやからぬ心も
乃乃川の中は

晴日あけく十首方よりせゆ一秋と

有尔光俊卿下

人として仰いよとわめりよとつておとす秋の秋

月方中に 中務の親王

今もぬむくれ宿乃月影は露うみえぬあさせそ

前中納言の家

神の今くはつこよやうりそつとせあま秋の秋

五十年中見月 天上天竺

赤めくりあまの娘とよふも光てそ月ふ阿婆道

百首のあてまつりし時月と

後醍醐内大臣

けりあまそらのつとせぬ涙も光てそりあま秋の秋

光のまもり入道お持政家秋二十首より

中納言の氏

秋のよれ月うみえれの中にしとむしうみえらひ

内裏ふく十首方人しはくまつりし時月

前草薙と 侍法印の家

我がぬ草葉よ月のやうりてや神よりあま露と

崇徳院御時百首のあてまつりける時

皇太后宮女中後成

嘉永二年の枝とにやとをきり翌年四月五日
嘉永二年百三十一日野月と

前大納言の家

兼家の名は嘉永二年四月五日の日記
建保二年内裏に命合り

大納言通方

七月五日の日記に藤原氏にありし事
光俊の日記にありし事

正三位の家

兼家の日記にありし事

月方日記にありし事 前大納言の家

八月五日の日記にありし事
藤原氏にありし事

藤原氏

中納言の家持

八月五日の日記にありし事
文永二年八月十五日藤原氏にありし事

おとめ日記

嘉永二年八月五日藤原氏にありし事
藤原氏にありし事

藤原氏

とらふと文の影のほろひさかたを故と月と

歌入月 右上天皇

左のそめそまの山に今もわが月のおとひ

むふ知 雅成親王

月の入本と念ふあゝつて道て河旁あま

そられり

續古今和歌集卷第五

秋寄下

霧回朝麻とふととふみゆり

前大納言為家

体骨れ物と山よのまこめて海とあつと麻はら

文永二年九月十三日合野麻と

右上天皇

神ととやつまよこふらん志あけさしとゆき麻

関白たか信

よらむあやや麻の麻風ふそよらそ麻とつまよ

たふは

あつひのひまわりふんふんきとの海をわらふとの歌
前大納言資光子

やらひらさきの浪芽は輝風よりより赤の鳴りあ

中納言為氏

夕らう聖原乃小籠ら枝よりわお物の麻結ん

巻山地洞あしくおそく梅一約ふに

あらんや
新院弁内侍

わつてにまるとくふや娘の聖ふとくわきあふん

十首方合符一に新麻と

土御門院小宰相

つよりふまるとやたのむ秋風の月ふさむしよ麻

麻とよめ
貫之

秋花よしくらゝ露の麻の急らおつ海あじ

建保四年百書方合よ輝と

順徳院御奇

あつひのひまわりふんふんきとの海をわらふとの歌

あらんや
舒明天皇御奇

夕らう聖原乃小籠ら枝よりわお物の麻結ん

人丸

よみは秋の物けのふりては毒よふ麻の志はむら
十首方合よ 後二位家澄

天乃川林のひと秋は染ふはくの小志はねと鳴ん
麻智何方よふととふもせ給ひ

後白河院御方

山里秋のほえそはくあつてことと志は麻は秋
ふれ百番方合よ 糸織雅雅

とりしとふと志は思ひはてはぬふとぬとふと
弘安元年百首よ麻と

前大納言為家

小倉山秋はあひひとけく麻とあつとわらぬ海とさく

家七首方合よ 月下麻とふとと

光の字も入道前坊の言

三笠山月山りのあつて晴て雪よりたはたさく
建保四年内裏方合よ 秋寄

前中納言定家

小麻あつと山乃陰はあつとれは風約まら月とと
百首方の中よ

我のこころあつとあつとあつと月はらふみをお
秋方ととあつ 平兼盛

今より八月の心物と秋風の吹よつまをなせり
山家栲栳と 太上天皇

山の家よりやの山をなせりやとやふさ
十首方合よ岡栲栳とふさ

順徳院御歌

秋風いそぬ神とあさねとあさ里よりなせり
名前百首方人ふさけりふ山と
さよの歌

山にやよとら月の里とたふさあひさ
野ふか 前中細玄定家

久保あつらさよの山をなせり月をふさ
九月十三夜あつら油と十首方
けりの中い 前大納言為家

あつら首たつとあつらさよひも月を神
文永二年九月十三夜飛山の他細
方合約 小川月と

大納言通成

飛の尾たつら河をなせりてらよの子を
百首方合中い

順徳院御歌

虫のねむりのふたりぬれをこし秋の末に新を
千五百番方合奇 皇太后后多事後成世
うまそ下系を付秋の落ちる風ふ鶴あゝ

煉方中 関白前た工臣

吹風もらそさむじし鶴あゝらぬをの秋れり言

車越法師

深茅の心はよその浅茅生ふの風らむし鶴あゝ

建保四年内裏秋十首方中

後二位家隆

深茅や竹の心はたさるふんうみえぬらうた歌

行階務 ともよとよませ給けり

後三条院卿

秋の雪ふ振ねせよとやうきふりてささくさ

秋方中 月花門院

よはりのまがふの煙あらしむくゆくさむね

辨景舍女所

煉音れあえまくと鶴をいふはさたる月そふ

又永二年八月行のこも色物とつりて

号よあせゆ 小水郷秋陸とふと

冬上天皇

権少僧部云の

秋のそとといふゆゑに秋のそとをいふ
建長六年龜山院のそとといふゆゑに
一ゆゑに秋のそとといふ

衣笠前田久長

この里のそとといふゆゑに秋のそとをいふ

正三位基雅

立回^非のそとといふゆゑに秋のそとをいふ

冠不知

中納言為氏

秋のそとといふゆゑに秋のそとをいふ

寛治二年百々よ松紅葉

入道おと政大信

しるしに秋のそとといふゆゑに秋のそとをいふ

秋のそとに

所をそとといふゆゑに秋のそとをいふ

中務親王

そとをそとといふゆゑに秋のそとをいふ

洞院持政家百々よ松紅葉

前入納言為家

そとをそとといふゆゑに秋のそとをいふ

日吉社より合よ紅葉深雨

前中納言定家

深まらぬ秋もあもそむらう神の色あけ秋の山
百そらうのちせりし時杜若葉

衣笠お田大氏

しつあつとをきめてはるむらぶららの杜若葉
をふまへてゆきらにんごうの山は紅葉
のみえゆきか 友原剛俊

久しぬ痛入秋松とこれつと思はるるお松女
二百の山方中氏 順徳院御寄

秋風よあひく後芽うら枯てをよとあふ旅のみ
子五百番より合寄

西園寺入道前太政大臣

あふくくふあけの風もあわくうらさ紅葉
九月乃比真觀飛山は地洞よまうりて
ゆしみの日つらけり

太上天皇

あふくくうらさゆきらみ人の心もあわく
をらり 光俊朝臣

よもらしきうらさゆきらみ人の心もあわく
をらり

身子院山屏風より

伊勢

うらたつと園せうらりみらわぬくわさくをを
延長十二年の陽成院の合年

よし人しらす

行ぬれ秋の海ぬる田ぶらぬこく
前月大臣基家百々方合

中納言

立田のみらふこと秋の終ふらるをわくぬん
百々方中へ 入道前をぬん

ゆてふ小詠とひわら言秋のこくぬん

秋方として

前大納言忠良

秋の露ぬくこととや葉葉と風のふん

九月五日内裏ふくく二首方梅せぬ

小暮梅菊

中納言為氏

ゆく秋のこくぬんと葉葉とひわらふ菊の露ぬん

人ふくくせぬ 百々方中へ

言秋

風ふくくの本丸のそふらとらそきて日秋のこく

室治二年百々方中に言秋

前二細と基良

く秋とれおとつらねはひん霜よりくつ身とて

九月廿五夜ふりやうけし

中務の親王

空と程輝のつとてやおひん海ふあつら

じつらめ

續古今和歌集卷第六

冬年

初冬れんごふみゆり

壬生忠岑

このころこころ秋とてまほしうたふとし物より冬とて

皇太后宮女俊成

いふととやうそふと秋の何れか病もまほし秋の病ふ

土御門院忠尚

冬年よふ霜のりも枯初てはつら秋とみえぬ野へ

百とてふもてまうりけり

前田大佐 基

行みえぬ海の霧と形見あはれ神よのたつ輝をば
むしらす 徳倉右大佐

秋のぬ風よ木葉のあはれささひりり冬をさひり
中務親王

冬をぬくらぬと志る我神の波よゆは河をさひり
源具氏卿下

いとゆゆ神の河をよりのたえとさるいと冬をさひり
独字時雨とらふと
後述大守たる佐

神あすらすのたえなる河をば花よさるいと
むしらす

神ぬくと光そのりとは河をさるはふとさる海をり
むしらす

我神のつとむまはるや神を月をえくふとさる
祝部成賢

立田ふとまのいと神を月河をよさるはまは定
子五百番を合ふ 赤陽門院越前

木葉さるめりすらす河をさるはるのたひふ
むしらす 中納言家持

吹風よりくはれしはかしのお葉に秋の河を以て
百々方人々ふりける時

後鳥羽院御前

ふきよきまはる吹風よきふくらしの風のき
前内大臣基家百々方合り

友原作長卿氏

梢より秋の深き夕河をりしはふくし葉の
建長五年十月三日よき家落葉

右普光院僧為教

葉のくはれしはかしのお葉に秋の河を以て

冬は方の中に 慈徳大僧正

よのまはりぬ葉のふし袖あきて時をよぬ葉の
百々方の中に 後鳥羽院御前

本葉らし生向の葉に秋の河を以て

堀川院御前百々方合り

秋冬 友原殿仲卿氏

おきよきまはる葉のふくらし葉のきく下葉のきく冬は
むふ知 慈徳大僧正

りみち葉のらむぬきくやたけくえん風のきく秋の
枇杷屋を石文

見ふくのお子おとみりみらとらそひよさきよあは

船恒

なる色ゆりみらるる色たふきし音の川ふらせは

河落葉とららんと

中細玄為氏

風海河漸の小れとみは程せきわきそあつみは

糸極前岡白入井河はゆりて水色紅

葉とらふととみゆり

堀河た大臣

とふせ川着の漸とさつとさつとふせの漸の園と

兼曆二年あつ道遠よあき落葉

大細玄為氏

嵐吹このあつれみらととふせの漸は遠とさ

承久二年十月光の景も入道お極段入井

川のりみら月よゆりゆきつふとれ

順徳院御寄

大お月みられあつととふさつとあつとあ

水色も光の景も入道お極段入井

お葉の入りの松よふりあつととあつとあ

堀河の順徳院御寄自新の合約をり

新山院入道前右大臣

庭の面よりなるひとく本葉をその道風のそと
文永二年二月三日方梅一節小庭落葉
前右大臣

庭の面よりなるひとく本葉をその道風のそと
形一す 平重河下

本葉らうのうけの久堅の月と冬をさひり
子め百葉なる谷の

泰後雅理

この月よりいりて下葉のうけ本葉のそ

建保四年二月三日

入道前右大臣

本葉はふくぬの山吹の風も行くやきり
内葉より二首方梅とれ約きふ夕落葉
とふとふとふと

夕附日よりもあつた本葉はねとおくそら
道助は親王家五十そ方よ朝何と

西園寺入道前右大臣

本葉らうのうけの久堅の月と冬をさひり

題不知

深はくともみこころのそら又何處とぞりふゆふ兼
三音そふれ中に 中務の親王

とらふもそらとすうら風はまららとあつてふ
百そ秋中ふ何處と

とそら若田のともあじししは落とすことふ
曉更何處と 俊恵法師

いそら何處とせぬ鳴も老のゆえに袖あそえ
百そふれ中り 何初冬時雨と

はとそと袖あそく神宮月ふ何處あつて
鷲目院梅窓

むしらす 月苑門院

みよのまはる梅屋ふり何處あつて袖あそえ
河時雨と 前内大臣基

いそらも袖あそく川とそら何處あつて
あそら何處とそら

入道前大臣長

とそらあつて浦のさやれ何處とそら
百そふれ中に 友原信實朝下

いそらあつてあつてやとそら
建保三年六月和ふあつて合は曉何處と

後鳥羽院御寄

こゝろのちのらじとてつゝ左ののこふの村雲

日守年内裏十首方合り

糸織雅雅

白あけ夜ふきわとあじや屋そとくちあせふ

冬方乃中い 前内久良

ゆきつらむのこよふゆん何多てとくちあせふ

何多とくちあせふ 中務親王

風もくくく雲の影より元ふのこてふ何多那

冬方乃中い

前中納言定家

吹風のやすふ葉れ下りおととそねる冬葉

子立百書方合のこ

後京極拾政前左政大臣

おとつむ折田のふ葉やとてこいしおわねは秋と

冬 子 立 百 書 方 合 前 左 政 大 臣

いしそとあゆらとていしおわねは秋と

冬 子 立 百 書 方 合 前 左 政 大 臣

雪のみかおれはとていしおわねは秋と

篠の葉よなとてあつ霜の消ゆと

入江道衡卿下

藤のふじとつる萩のまねりりしの露もぬれりか
冬方中に 中務卿親王

日影さすうと影のま音おとりにほほ輝く露か
弘長元年十一月巻山他洞十そふ沙菊と
権入洞云形朝

柘とそん故悲くも白菊のうらふ冬ふまららん
あふらんを 延長御前

らりそくもさる河の菊ささかろふ冬あのかくとき
源順

ふらりん時やみらるむ冬れのおとひらんふらき白菊
百そん中冬と 前内大臣基

ふらりん時やみらるむ冬れのおとひらんふらき白菊
弘長二の巻山他洞あらん十そん冬ふみ
ゆふお冬ささ 冬上大臣基

お嵐山のふらり河の菊ささかろふ冬あのかくとき
あふらんを 故冬羽院御前

難波江やらんらん冬あのはのみをそ蓋おとらん沙菊
寛治二年百そん冬あのかくときらん河橋菊
あふらんを 資資冬子

沖津浦志の風のふきしし我をばやうふ露のち
子もよめる 前大納言為家

奥の風をく吹しかたわらふとわらひ子もよめる
光俊朝下人 小百重をすめ物々冬鳥

中納言為氏

都のあそびもあはれなる川の河舟をこぼし
建長五のこ首を穉し物 小室の徳子

鳥 源雅言朝臣

志の風を吹やせしし奥のふらふらに
前大納言

川の舟のねえは子もあつとやその枝は海をかん

子五百番の方合ふ 前中納言定家

鳴子も袖の漆とよひしりらう 母のねえは
らららなをよせ給けり

公卿門院中納言

夕言は海とよあす鳴子もいつ成あまの袖ぬすん

伯千鳥と 中務の親王

浪のち波るうさのねえは花とよひしをけり子もね
埋子もよと 右京光俊朝下

親もあつと舞の境風はえて入志がとよ子もあは

野一子

入納云通方

ここのつらふもはらわらふ風やを鶴もきて子も鶴

小弁

うさねとさいつらまに冬秋のふもつらまてふより

子も鶴もふふ 年道法師

くらひらけし浦子も友まふつらふ月

光の雲も入る前接段家の百そとわして

うさねつら 夜道前月大臣

橋もてらふさねを井のらふもつらまてふより

野一子 友原基政

伊豆橋や遠よ月の影もそとまてふより

用白前大臣長家百そとふ

侍後新敵

あまうさもはけら神もそと秋の月小物も

正治二子百そと 守光法親王

うさねとみさしたまに影もれて月もそと村雲

野一子 順法院卿

深き秋の雲井月やゆえおん秋はそとわらふ

百書奇合

そらつら野田の玉川みさそとわらふ

都志す

入納云浄伝

雲のぬけ良し風は月山えてわらわらまはる浦を

冬方とてよあ 素還法師

三音聲のあさるをよまじ月や冬をこぞわぬわ

都志す 真照法師

静まらば風さじまの浦は入江の子をしそめ

小島 式子内親王

蕙ののりいし何れおのよに碎てうはらすわら那

清徳云家屏風 中務

そが山松風さじよ茶や山え聲のほやさまら足

江雲を不敬とてよめ

岡白前たる后

もろと破の浦あし山え言そわら雲は初ら

わらとてゆけり 権入納云形朝

冬とまよふの入江のりよまぬ風さじつら

氷苗水都志すよめ

皇太后文年 後成

冬とまよふのあけらとて岩りら都志すよめ

都志す 近忠院御奇

よのあけらよは風や山えおん首入水のけい

家十首方合 竹まふ池水すまふと

よふとく 後京極格政前左大臣

池水といふ風乃吹よけてと知まらぬの白くは是

貞永元年百三十一みゆけりふ水と

光のまも入道左格政前左大臣

はえまふまふ吹風よあす川七瀬のまもり

は下まふまふまふまふまふまふまふまふまふ

冬奇 大細云良敷

圓漸まふまふまふまふまふまふまふまふまふ

三首方集一竹一次よはあふと

六上天皇

あす川筋をまふまふまふまふまふまふまふまふ

前左大臣

まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

弘長三年十二月内裏まふまふまふまふまふ

まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

吉野川筋の川をまふまふまふまふまふまふまふ

まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

細式をまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

正三位知家

打しす約ありじ也白妙ふらわられ川乃水
前大納言基家百首方合奇

は市下實伴

冬門の関をこえてくまのいふせとせく妙なる見
妙と
開白前大納言

くまのいふせとせく妙なる見
守元は親王の御あしそあり

兼道法師

くまのいふせとせく妙なる見
くまのいふせとせく妙なる見

坂巻源院河奇

燈ありひしとくやうは足富士ありさききと也
冬雨とあり
前中納言定家

ゆえくすまのいふせとせく妙なる見
冬雨とあり
土御門院河奇

くまのいふせとせく妙なる見
前内大臣基家百首方合奇

土御門院小宰相

くまのいふせとせく妙なる見
建保内裏方合よ冬野家と

光の孝も入道前拾遺の旨

道はもとあてとらひの持らと念れし程ふ孝も
百も水方の中に 土御門院の中

一孝れとのとの系得て入るる思ふは
光の孝も入る前拾遺の旨ふ孝も

正二位知家

入るる思ふはとらひの持らと念れし程ふ孝も
寛長女所入内屏風野外孝將とらひ
ゆけり 後二位家澄

一孝れとのとの系得て入るる思ふは

後鳥羽院よもてまうけり百もふ

光の孝も入道前拾遺の旨

依程の思ふえり人の名もふ孝も
程ふ知 曾祿好忠

冬ふく程ふ女もあらあつたふ孝も
後法皇寺たふは家十首の雨申書

皇太后文を更後成

程ふ女もまの思ふ女もあらあつたふ孝も
寂勝回天王院の障子より

前中納言定家

とらせや若殿はれの本朝さかりの風ふりつる雲れり
二階二の百とよ 守尊は親王

難波人蓋火とよやふ落着れりとの子い懸あさり
は平良守惣聖女首よりとよとめ坊々
よ書 友原季宗御代

と惣聖やいふ雲のりりん記をみえは海舟
むしらす 平泰時御下

階高のれゆけは乃波はへは消のこはるやあまつら
巻二の百とよとよは後書

長部 澄親

きよく日御は神松みえあまそとよはあまの雲白

新院 弁内侍

とふんもえやのゆえん三梅のこ書あはたのゆじと松
庭書と 友原澄祐御下

とまふ記をいってまゝねりゆきそ晴あな庭の
心家書とつとよとよみゆり

は平下 善海

とよい書はらとそとよひかたはれ月日と人いそね
心路書と 侍伝行家

ゆい合は我よりはとれはとよい書そとゆめとあはし

冬方れあふ 後二位家澄

約りのゆきさるをうも白雲あまらふふのゆきあえ
建保四年百三十一

前中納言定家

ゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえ

弘長元年百三十一

中納言為氏

ゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえ

十首方合よ聖が書と

大宰権帥為経

ゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえ

弘長元年百三十一

大宰権帥為経

ゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえ

大宰権帥為経

ゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえ

洞院持政家の百三十一

友原信實の氏

ゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえのゆきあえ

書と書と書と書と

今上御奇

難東山とみゆり尾上ふはくく庭の志く書
後法性も入道前開白奇合り

皇太后后交奉後成

為おとふ交くそあまれ山後や書と月とをひり登

冬方中に 後二位家澄

つりてゆく老ふおれもいそふ書れりあつ月と書

弘安元年の百そくよ書と

前大納言為家

しつてあふそれゆふこのれとぬ乃月よ書つ白書

後京極坊及家方合よ書中松樹經

後二位家澄

書と山嵐の書とつりて書ふそあひく書れ松と

百そく外中に 慈鎮大僧正

と物れい書とつりての浦あまや淡松とえれ故ふ法は

日吉社よあてふりけり方合よ書と

正三位知家

月影のりほにけりそつりて書る尾上の松の書とてみち

寛元元年大嘗會に王基方女二前よ少將

由得くつりけりふ書れふり日いつりけり

貫く

まらしくぬわらなれど元はもとこそおぼえりけり

炭竈と

皇太后文孝後成

小室のやうとみまはるらむ瓜本とよりよりの

形不知

前参紙教長

立よりそれゆゑと尋ねどいあをれ我身小のりわら

土御門内大臣家より合よ海老蔵言

二条院續成

わが政の若もられりし流のそむくも御とて

蔵言のちと

前中納言定家

けしめ命よりけりしとていふもいふも年れり

とて乃言によみゆり

皇太后文孝後成

とせむいそむらりけりしとていふもいふも

若よりのち

部一子

凡河内躬恒

そまてあめはつこもふもみ神祇乃こはれ神のくじ
三首首方中いこまいよ

小上天皇

とくまはつこもあじこ神祇乃あめりあふ奉じこひり
又永三の八月十五秋内文の由こらあてふ
わたりてゆくれい 志木田延季

多程らつこもひの神月又つて夜うめりり何ふて文

部ふ知

西行法師

神風よとくそゆせつ橋の文れ然乃ありて

寛治元年九月十首方合よ社取祝

室后文太事師継

神風やいとの河れいあもやとせれ治乃奉そのひさ
建仁元五の五十首方合のこ

加陽門院越前

神さひののまじり世よあめはつはよあまこらあま
又納え通方よあせゆまら石清水方合よ
社取月とふこまこまあ

卜部兼直

久き月のあふたこいれやげさ新とこるあ

日徳河系使つゝめてゆきし時より一に舞
人の清原おしりけりしとよひ出く神皇
重保よひつらうきり

友原澄佐御札

君みとも様ゆきしにまきし神のめくしに心なかり
新院山位の時賀成行を日見せし
くはく還濟のちぬきりゆけしに心なかり

少将内侍

あめだつてきし神のこころきりぬきし
百首よりとまりし時寄社祝

友原光俊御札

くろくその神れゆきしとよおきしに心なかり
神祇より中に 志未回延成未
神をきりぬきしに心なかり
先のまもり入道お持政家より合はるる月

藤原信美御下

かきし尾上の松れ枯風よ神代とよりてよま月
平野社方合ふ 垣二位家澄

難波津よ冬よりりし世に花ありしや平野の松よま月
雪乃河よりぬき野ありしに心なかり

順徳院御歌

去日野やこその御生れ勢のふとほしめしに神をたるとん
百とれ方よみ約けりの中に

後京極坊政前を政大臣

葵のあまやうすれにの松もよもひつとそめきうしの春を

筑前國菩提のあうしに松とよみ約けり

法皇御歌

子もよ神代はしらとて松乃松のひささきとて松乃松乃

歌一らす

正二位知家

あつてそのりめふと石とふれ結とんやいひけり

後京極坊政前を政大臣

つらりわがれ浦風舟のしとあうしめきん玉津崎のあ

正治二年十首方合よ

有京極坊政前

このそらわがれらふ松たれて君とやまほし玉津崎非

先後朝にゆきせ約きる恒吉三千首よ

神祇と

卜部兼直

このそらわがれらふ松たれて君とやまほし玉津崎非

家よ百とれ方よみ約きるふ

神

後京極坊政前を政大臣

文の通し年といふは浦さひく神代は松の松の
信吾よ由りてふりけりふ小松の松さうま
まのりて見られ老本よぬけしこ

前中納言清長

神垣よみ物松と老とまの心とらるる松と
中納言河八十橋家臣のふり承て松さ
ふとたひてはとゆらつとまの松の
とまふりふまうて我家よ代とあつて松
とめ松さうまのりたくとひつとまの松けり

昔部之清親

見それせと急とまふは信吾の神代首とまの
信吾よあてふりけりふ小神祇とあ

中納言

信吾の神代とまのゆらまのりのからすま
建保三年六月二日松方前と合よ松
建保

松方前内大臣

信吾の松代とまの神代とまの世とまの松代
建保五年六月二日松方前と合よ松

前大臣

松方前と合よ松

住吉社の遷され候年の二月にて
此のくふかの社よりみくちなり

其上三ノ宮

神々み程住吉と云ふをわが世よむての事なり
くまの河の舟にて

然野門せらり候にす松舟のついでに神のおま
くゆの小まうてゆきつ時人乃くくまを
政大臣後一位よりあわらむと云ひついで
よきゆけり
入道前大臣

三徳聖の社々々此のまのちりそとに社あり

くのとてめてくまのへりてあきまうけり
式乾門院御遷

なられしころふむつる遊つまにとくくめらり
建春門院皇后文と申せり時日吉社よ
新造をける舞人ふくゆきふ山社系に
美栄ふと力歳とありくまのまうとて
土御門内大臣

美代とくくあぢふとてあきまうけり
日吉百々年中に 慈徳入僧正
物忘れ心ありぬ月あけりて我の心ありとふ
そまむ

客人の文よふあそりり

後京極坊政前を政官

ふふ又ひりよとよひてやまふいしれ白根や雪のふき

貞應元年入掌舎徳紀方祢楽方

千枝村

正三位家傳

柳葉のら枝れむのゆりてとよふおられま向まそら

文應元年入掌舎徳紀方祢楽方

氏部之隆光

ゆふみり岩のいれ柳葉と山をそりつ美代のみあ

社祢楽と云と

祝部成茂

橋をたるとるやとる所を祢乃いさふ月をそりぬ

白河院の山阿阿つらつらめりふよりて水

さそくふようすゆけり阿唐後と山登れま

ふまうそりのみろういさまつきい

た京平文政補

身をつとて照しむあふ海とふあつゆとふら

そのらひきりあわつ建けつとあん

述懐乃山阿阿つら 土河門院水舟

祢乃ふらりはまうつ光そとらや祢のつとてふん

光のまもるる前坊政前を

の月乃りて也... 澄恵法師

二月乃り十縁生... 光俊朝臣

水月と... 毎夜座禪觀水月

土御門院水月

月の月心... 月乃來座禪れは

天上天宮

非有非空... 非有非空乃

は是は... 是は是は

十如是... 十如是

故系持持政前

本末究竟等... 本末究竟等

二翁之有家

後芽原風とまらふれ末の病終るをねとて

信解不

崇徳院御命

うそまじらとらねとていそらつて

藥草吟不

前入僧心之家

心解ふとらぬ河多深とて

才子不

年直法師

波々や亥の玉とじすいせんあり

権僧部伎雅

うまうとら神よけむ玉とて

まらたれ

空塔不

は性入道前書白を改書

中へとらうふれとつやけとて

東之條院乃由あふ一不絶信書され

けつ法よ

前大細云云

そのとら契りくらねら

提婆不即姓南方のらと

お中細云定家

とら海乃庭はあふ宿りて

安永の求於云量國中乃至名を不可得

因とらふと

崇徳院御命

むふ知

前開白たる旨

弘長元年六月龜山の仙洞より如法宗
師の御時十種供書乃散苑後一位貞
子洞よりあてまつりしむふ知は

入道おとせぬと旨

むふ知を契りしあはけのむらりれ末まで教ふりす
れあり他洞よりかきしめて如法宗師の御時
普賢大士白家系後心の心とよみゆき

権大僧部 冤實

又の面影をてやうふらふらふのふ河のわりの月
三舎乃曉とむふ知よりみゆき

は平良實

くつとあふれりれあやをん約曉いさうらなりとむ
熾成光はをこふいゆきを内とむいつけゆき

前権僧正成源

くむしあはけの水れれ末ふらふいわらふとあすくれ
一切經一返りてさうとむいあらあうとら
ふ子巻よをこひけむいそのころいそら
命がらふたむふ知よりみゆき

衣笠前内大臣

じそら申す命をそふはの水に母ふとぬらぬ
冠不知 坂鳥羽院卿方

いふふよとて海ふらぬとみはのふれおふふふ
澤り若君と 景法院卿方

汲てとる人ありそふふとふ井のふれおふふ
天台大師と 中務卿親王

着いふ玉の泉れあふふや水けの水ふふれあふ
新あふふ

世とたふめ氏とあふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

友原通佐卿方

あふふふふふふふふふふふふふふふふふ
教是佛指祥是佛心還有法深吾と向
てむけふのむふに 思願上人

あふふふふふふふふふふふふふふふふふ
止観乃又此即教の深のふふ

そふふふふふふふふふふふふふふふふふ
僧正信愚山階寺別當よりたりて神てこ
十海とふふいれふふふ神てふふふふふふ日

ゆりてゆきふ難儀のいそごうにけり
増弁は布下刀よりのらふれいふふと
いけといひけりさるるいふ書て出づり

貞慶上人

いふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ

入道前太政大臣

世とてすまふ身と世とけいこいふいふいふ
十波舟客れ中の檀波舟客いふいふ

後京極坊政前太政大臣

うじのそと月とと輝て色むむいふいふ

光の客ち入たお坊政前

とひいふいふ我身もよそふらふいふいふ

多親のいふいふ 信平 實伴

いふいふいふいふいふいふいふいふ

色則是宣のいふいふ 信生法師

いふいふいふいふいふいふいふいふ

越ふ知 僧部 玄賓

いふいふいふいふいふいふいふいふ

坂本 羽院御奇

由よくく佛の國くにととすす由よふふととりりをを浮う世せと

薬師如来と 正三位知家

ららひひわわららひひととららりりののゆゆめめををむむねねたたととりり別べええ

野ふ知 前津師永親

いいふふのの藝ぎののああままののゆゆたたよようう身みたた

佛のひくとまうらうと

僧部海佐

松まつ木きとと孫まごとと心こころののかかりりととむむららのの雲くもととややととああまま

秋あきとと入いりりとと 法は下げ智ち海

雲くものの雲くもむむららととままららのの程ほど心こころ乃の月つきははままととああままととりり

源具親朝臣

ららのの身みととししととああららひひととのの徳とくぬぬららのの雲くもよよたたの

吾わが量りやう身みをを控くわう軍ぐん八はち新しん心しんととししととのの徳とくををらら小せう供

書かき給たま佛 澄あき惠け上人

色いろくく花はなのの白しろいとと物ものととししよよのの佛ぶつよよのの白しろけけらら

樹じゆ統とう若じやく若じやくととららららとと

大僧正澄弁

んんふふいいららふふ本ほんととははととととああままのの心こころむむととささととららととららををむむとと

花はなののささととりり小せう松しょう木きとと親おやせせららをを結むすひひくく

花山院御奇

るよ上天宮

みふせしらの枝れをこぼせしは言提のあひこ
念珠とりあうなひくわしは家内
よまうらりてまけりてかみく

慈惠人僧心

あえくあめくとりさつたひふあ

海よりあれ

續古今和歌集卷第九

離別奇

置因とふ女とめをこきてゆきわら花と
ろよけこいゆゆりて道はあふりゆ
今時とあえれせ行くゆませけり

顯宗天皇御方今女宗代
帝也

はほやあふのし女何とらみぶられて思えはとわ
志方の國よゆきわらりて今まうらさ
まけりてよ御方とあふりすそと

延長御奇

為るのみちかたはゆい後人のいふこととてやむいふ
河乳母の遠くをよはゆらりけるふ時來た
まらるとして
天曆御方

後夜にてもつらんふらりしゆに袖より露けりる
天延三年十一月六日殿上にて宇依伎の
儀とゆふとしてよませ行ける

因融院水方

弟代と稱ふもの使ふ別をいへる行はるるん
と事大武之遠はしふらり考ゆ來
つらふとして
小野文右大臣

ゆめりのをみまわさる命とてふらりるが
返一
と事大武高遠

考代をうふとの後をいひてそゆいふ風つら
友原保昌の片丹後ちふらりてふらり考
よ和泉武部といふらりてふらり考
ける
権中納言定頼

ゆいゆすといふゆらりるふらりるゆいゆらり
天延二年正月贈法之位と市丸長門り
ありてふらり考ふと攝河の智らに儀す
よとゆける
権中納言

ふとぬ我身ありせ別路よ余ゆふとひとて

設富門院左補

ゆりこむあはとゆへさ我身ふとそやそ別路あり

鉄別乃心と 前大納言為家

ふりえんあふさやたのわとも別い為家そあは

冬永元年九月廿二郡別のあはあふ

たぐまうとそ 月苑門院

わふともしもとあはし人あはとそつとひふふり

わが郡別の長者送使そゆらとそ

ふりまじりの嘸也原乃あはけらうけ

権中納言長雅

あはとそとわらうたの極家露らあふ袖やあは

登蓮は帥遠取あまうりまうよとあつと

すそと 頃三位頼政

あはらあはと我うそら極家あは日らあは

急感しうふたりそらゆきうふ

清原元輔

あはらき田子あはと袖ひらそ老乃別あは

塩河院の四時百そあはとあはけらうふ

あはらとあはと 右京右仲下

玉ふり命と云すわはまわんと致す身と老を

あしんと 源孝行

あめもきふらりれ別路と云命乃程そふ

紫法院百三十五 友原清輔朝臣

初末と云ひく出別路ふと云きふらり

むふ知 藤原澄信朝臣

さいふもゆぬはと云ら先あふら

東はゆらけんと送りて老返らり

として 源俊朝朝臣

はあふと云たのきんお坂乃雲あふら

慶政上人のりうと云らりけり時ひつ

しり 後二位家澄

ふふらり日ふらひはにのあにまてい

返一 慶政上人

のちも程と云くいゆらん志ふそ

のちけり女はけりまらけり

後二位家澄

しんも琴の月のと云とそふら

時物と云らねと云遠前はゆらり

と云らりけり 伴勢大捕

續古今和歌集卷第十

新撰奇

新撰奇

中務之親王

雲のわらふ末はひらめふをそひたそらひ

接のらふ

心よひまよひより雲は波まらり雲てむはなれ松

百三十八 中務之親王

行よりかへりゆめはじ心禁よめらふ浦の松原

はらふをいふとこゆるとそよめる

人麿

とそりたはらふの松陰よらりてゆえよ色保ねを

持統天皇吉野をみゆき一拾りて

よみのまら

依保たふれ

くらゆふの風さひ接はて衣ふらふりて

部らふ

よのまら

心れいらつさねをなふらふもよそはゆきふん

接のらふ

貞慶上人

梢ふみえはぬらふとそあふらふりて

源道深

あつたれとよきれあふいそくやあめのんぬん
後乃乃そよあ 平春河朝臣

らつきのられり原所^もまてまき末^もしむ二村のふ

夏後とふととつと約けり

春後雅雅

魚とみそあなれりさいぬと程もたさゆの中

部一らす 前大納言伴平

浪と聖徳うらさふ神あまてはなぬききねあか

ほの國とゆとふあよゆきり時つと約けり

中納言伴平

猿人^の社とくくぬふり冥使こゆるすれうを

後京極坊政家^の十首方合よ秋徳

卒直法師

相板とくえあふそぬ秋風よと急そと白の草

福原の朝よゆとまりけりふ生田とふあ

そそあつとさひやうそ人のつとつらき

大京五丈修範

さひやと生田とふれ秋風よあつとふとあねえと

部一らす 人丸

らつきのらつとつと約とえそと下霧よあまふけり

都下の初らとて二村のとらえけるありあり

前右大将頼朝

よきいせ小藤のうの白霧と被ふころ二村の山
洞院持政家百三十一

藤原門院少将

霧をさすの志れあつふあまりて後乃神あり
修好乃たそよみゆける

法下良守

伊を流やあき流の浦つゝ紀のこひて三月
善光寺よゆとけり河をさすとてあめぬ

よふとらてよみゆける

前大僧正覺忠

こよひわさるゝとてあめぬとて月約より流るる
後の方れ中に 中納言為氏

いそぎやうたえとてあめぬとてあめぬとて
あつまはまらけり河をゆかるとてあめぬとて
ありきとてあめぬとて 政村頼下

あつまはまらけり河をゆかるとてあめぬとて
道助は親王家也十とて野経月

正三位知家

武藏野の初来りくぬふりこふひそらうの月
後の水方れ中に 坂多羽院津奇

きふ又雲乃故より出ふりらふのふりこむおの月
五十首方もてさうりけり時後の月

皇太后文を後成世

神のうまわらぬあひらけ月う後のこゝろたれ
崇徳院よあてまうりきう百そふ後奇

待賢門院堀川

色うあり雲あ月うみの後のそとやひらん
中務親まのあれさ合り

先後下

月とみありそとあくあてたくありあん
坂堀河院津河うへのれこもも月前後
とうふととうのゆけり

前大納言資季

都とののいくなありそとありあんの月とみあん
秋乃以人よらそとありそとありそと

橋忠幹

都とのありそとありあんの月とみあん
養作よありそとありあんの月とみあん

秋ふら

大京寺支那棟

とらふん初の日とてふこといふに雲はまきいふ月

後宿月と

新念法師

後ねとら神をも露ひなとてあて弟とてあつ月と

忍

貞治二年百とてふ小野月

右承澄祐下

かるといふ升ふ時あ糸たり枕とて神とてあ月と

忍

野宿月とてふと

前中納言とてあ

夕露のいかり月とてあとてやとりをく時あ人

建暦二年約方合ノ新中納言

後二位家澄

あつとて雲のつらぬはとて月とてあつとてあ

道助は親王家の十とてふ海孫と

泰後雅雅

新つと神とてあつとてあつとてあつとてあ

後の子れ中に 徳倉右大臣

後ねとら神とてあつとてあつとてあつとてあ

あつとてあつとてあ

あつとてあつとてあつとてあつとてあ

和方取あしく三首方合侍けりふ後泊宇
麻とふとと 皇を后文を文俊成

和とひつり此月の在る浦よりとら此柳茶の志
三首方後一侍けり

中宮女史雅志

後衣林の系末よあねを杉山風よ志智とて

後系極侍の家十とて方合り

后二位家澄

和つわ道袖とつふらん志ぬ後袖の秋けり露

和一らす 柳平人丸

和秋後あ一何道秋凡の志とさり又ふり鳴海

多子院のあふ小ねりゆとあけり時

立田山あしく 系性法師

あふらみらぬ巻ふやとりつ立田山よとふとえ

りあうふとさり侍けり時秋の風身ふ志み

けりゆあ日本よと使まりを母事ふと

和ひてよあ 権僧正業翁

りる此稍とさひ日ありとれとそのみらあや志

侍魂かふと九月より何あふりけり

女御殿子女王

秋とて... 武乳門院... けつとれりいそ...

武乳門院御遷

建保四年... 河首...

僧正御遷

建保四年... 友原秀成

郡... 日教...

海河河名と 皇太后宮女史後成

建保二年... 後二位家澄

前中御云定家

正治四年... 式子内親王

式子内親王

わね... 皇孫乃...

二條院續後

あきくそくは風月ほそくゆきけしあわすふ
十首方種一物一時開詠書と

友原光俊朝臣

秋そくはゆのうねはあきとらてそこのけり
あつふふりてゆけり時接方あきよ
みゆけりふ 後二位朝臣

あきくそくは風月ほそくゆきけしあわすふ
百首四方あきふ開詠と

土御門院水奇

あきくそくは風月ほそくゆきけしあわすふ
大書あきくそくみゆけり

僧正朝臣

あきくそくは風月ほそくゆきけしあわすふ
前大僧正道慶
雲のけりあきけりあきくそくあわすふ物あき
修のよきあきくそくみゆけり

権律師嚴雅

あきくそくは風月ほそくゆきけしあわすふ
後鳥羽院よきあきくそくあわすふ時

泰後雅理

如くして昔の事うらむれはわくもみえぬつる下みら
大業元年十月天皇正統元年四月よみゆき
あまふけり河 鏡人不知

友代のみらとるあはれいふか我衣のいぬふた
むしーらふ

そとるや誰彼とてそとらあひく弟れとてふ
今とてふらとるあはれいふか我衣のいぬふた

前内大臣基

君のうよしとるあはれいふか我衣のいぬふた

山後と

前大伴末緒教定

棟梁まで君よりあはれいふか我衣のいぬふた
建仁二年わが方取とてそとらあひく弟れとてふ
ととふらと

西園寺入道前を政大臣

言ぬとや我よりあはれいふか我衣のいぬふた
あまふけり河 鏡人不知

後鳥羽院下野

あまふけり河 鏡人不知
後鳥羽院下野

右京信実下

あまふけり河 鏡人不知
右京信実下

舟人の海に風をらみくいのくおすくぬ海の家
邸一々す 友永基政

舟より海を日とて暮れゆくやとえんや
行ふより舟を日とて暮れゆくやとえんや
たしよの玉は海をりけりふんあすすこと
あひてたつんぬの浦とてくんとそよみ舟をり

安永の陸右衛門の状

舟にてもしるふも舟にてもしるふも
舟にてもしるふも舟にてもしるふも

友永光俊の状

舟にてもしるふも舟にてもしるふも
舟にてもしるふも舟にてもしるふも

舟にてもしるふも

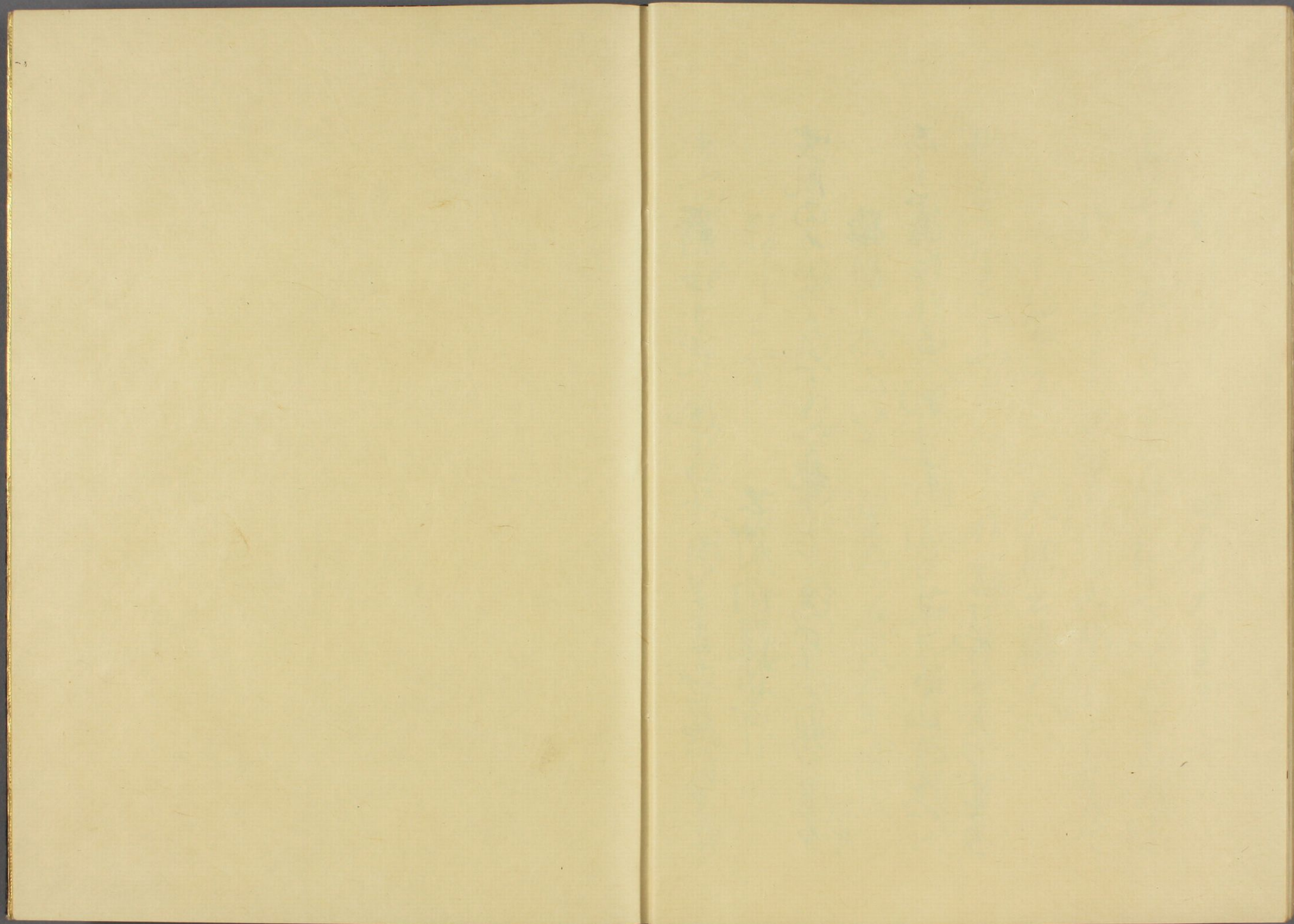
舟にてもしるふも舟にてもしるふも
舟にてもしるふも舟にてもしるふも

舟にてもしるふも

舟にてもしるふも舟にてもしるふも
舟にてもしるふも舟にてもしるふも

舟にてもしるふも

舟にてもしるふも舟にてもしるふも
舟にてもしるふも舟にてもしるふも



以下
3丁
白紙

